

ある繩の上には、赤子の着物と大きな黒いズボンとが懸つてゐる。ラムプの上の天井には大きな緑色の點が光つて、赤子の着物とズボンとは長い影をストオブの上や、搖籃の上や、ワアルカの上に投げてゐる。……ラムプがちら／＼すると、點と影とは風でも吹き込んだやうに動く。息がつまるやうである。スウブと長靴の匂ひがしてゐる。

子供は泣いてゐる。泣いた爲めに疾うから聲は噎れて弱つてゐたが、でもまだ泣いてゐる。そして何時になつたら慰められるかは解らない。しかもワアルカは眠たいのである。臉は垂れ、頭はさがり、頸は痛くなる。……臉も、脣も、殆ど動かすことが出来ない。そして顔といへば汗氣がなくて化石したやうになり、頭はピンの頭の大きさ位にちぢまつたやうに思はれる。

『ねんねんよう、おころりよ!』と彼女はつぶやく、『お守ははん粥こさへます……』

ストオヴの中では蟋蟀が啼いてゐる。戸の向うの次ぎの部屋ではワアルカの主人と職人のアタナアシイとが軒をかいてゐる。搖籃は悲しげに軋り、ワアルカはつぶやく――そしてこの二つの響はまざり合つて、寢床に寝てゐる人達の耳に調子のいゝ宥めるやうな子守歌となる。所が今は其の樂の音がたゞいら／＼してゐて押し付けるやうである、といふのは、眠りかけてゐながら、眠る譯に行かないからである。もしワアルカが、萬が一にも眠らうものなら、主人と上さんとは屹度打つに違ひない。

ラムプがちら／＼する。緑色の點と影とはゆら／＼と動いて、ワアルカの半ば開いた、動かない目に映つて、半ば覺めてる脳髓に霧のかゝつた姿

となつて現はれる。彼女は暗い幾つかの雲が空を横切つて互ひに追ひかけながら、子供のやうに泣いてゐるのを見る。するうちに風が吹いて雲が消える。とワアルカは一面にぬかつてゐる廣い道を見る。道には車が引き捨てられ、小鞆を脊負つた人達が這ひまはつてゐて、影は前後に動いてゐる。兩側には冷たい、濃い霧の間から小山が見えてゐる。と不意に、小鞆を脊負つた人達も、影も、ぬかるみの中に崩れ込む。「なせさうするの？」とワアルカは訊く。「眠るんだ。眠るんだ！」と答へるものがある。そしてみんなはぐつすりと眠る、すやくと眠る。と電信線の上に鳥がとまつて、子供のやうに泣いて、みんなを起さうとする。

『ねんねんよう、おころりよ。お守はお歌をうたひましょ、とワアルカはつぶやく。そして今は自分が暗くて息のつまるやうな小屋の中にあるのを見

見る。

床には死んだ親爺のイエエフイム ステバノツフが寝てゐる。姿は見えないが、左右にころがりながら、呻つてゐるのが聞える。親爺の言葉で言へは彼は「脱腸だつた」。痛みがひどくて、一語も發することが出来ないで、たゞ空気を吸つて、唇の間から太鼓を打つやうな響を出してゐる。

『ブ、ブ、ブ、ブ、ブ……』

お袋のペラゲエヤはイエエフイムが死にかけてゐるのを知らせに地主の邸へ駈けて行つた。行つてからもう餘程経つ……まだ歸らぬだらうか？

ワアルカはストオヴの上に寝てゐて、親爺の「ブ、ブ、ブ、ブ」に聞き入つてゐる。とやがて誰か、小屋の戸まで、馬車を驅つて来る。地主の家に客人として泊つてゐた醫者が、其處からやつて来たのである。醫者は小屋

の中に這入つて来る。まつ暗闇で其の姿は見えないけれど、ワアルカはその人が咳をするのを聞いたり、戸が軋るのを聞いたりする。

「明りを持つておいで！」とその人が言ふ。

「ブ、ブ、ブ、」とイエエフイムが答へる。

ペラゲエヤはストオヴの方へ駆けて行つて、マッチの壺を探す。暫くの間、あひだしいんとしてゐる。醫者はポケットをさぐつて自分でマッチを擦る。

「只今、先生様、只今！」とペラゲエヤは小屋から駆け出しながら叫ぶ。

間もなく蠟燭の燃差を持つて歸つて来る。

イエエフイムの頬は赤らみ、目は輝き、目付は醫者をも小屋の壁をも見透すことが出来てもしたやうに鋭くなつてゐる。

「これ、どうしたんだ？」と醫者はイエエフイムの上に屈みながら訊く。

「うむ！ 長くこんなだつたのか？」

「どうしたんだつて？ あなたさま、死ぬ時が来たのでござります。……

もうとても駄目でございます、……」

「馬鹿言へ……直きに癒してやるワ！」

「どうぞよろしいやうに、誠に有りがたうござります。……がもう分つてゐ

ます。……私共は死ななげやアならぬものなら、死ななげやアなりませ

ぬ……」

半時の間醫者はイエエフイムを診てゐたがやがて立ち上つて言ふ――

「おれの手にはもう合はない。……お前は病院へ行かなげやアいかなぞ。

其處で手術をして貰ふんだ。直きに行かなげやアいかなぞ……間違はずに

な！ もう遅いから、病院ではみんな寝てゐるだらう……が心配するな、

おれがひと筆書いてやるから。……分つたか？」

『先生様、どうして病院へ行けませう？』とペラゲエヤが訊く。『私共には馬がありません。』

『心配するな、おれが地主に話して、お前だちに馬を貸して呉れるやうにしてやるワ。』

『醫者は去り、明りは消える、とまたワアルカは聞く——』
『ブ、ブ、ブ。』
半時間するに、誰か小屋まで馬車を驅つて来る。……イエエフイムを病院へ連れて行く馬車である……イエエフイムは支度をして行く。……

すると今度は麗らかに晴れた朝になる。ペラゲエヤは家にゐない。イエエフイムの様子を見に病院へ行つたのである。……そこに泣いてゐる子供がある、とワアルカは誰かが自分の聲で歌つてゐるのを聞く——

『ねんねんよう、おころりよ、お守はお歌を歌ひましょ……』

ペラゲエヤが歸つて来て、十字を切つて小聲で言ふ——

『ゆふべは良かったが、今朝になつて魂を神様に……天國に、極樂にお上げ申してしまつた……連れて來かたが遅かつたと言つてだ。……もつと早くすればよかつたつて……』

ワアルカは森の中へ行つて泣いてゐる、と不意に誰かぼんの窪をびしやりと強く打つたので、額を白樺の木にこつりと當てる。で頭をあげると、目の前に主人の靴屋がある。

『何をしてやがるんだ？ ぼんつく、』と彼は訊く。『子供が泣いてるのに貴様は眠つてるんか。』

主人はワアルカの耳をびしやりと打つ。とワアルカは頭を振り、搖籠を

ゆるがして、子守歌をつぶやく。緑色の點と、ズボンと赤子の着物の影とが、顫へて、目配せして、直ぐにまた頭をぼんやりさせる。彼女はまた一面にぬかつてゐる道を見る。小鞆を脊負つた人達と影とが横になつてぐつすりと眠る。それを見るとワアルカも眠たくて堪らなくなる。で喜んで寢ようとする、お袋のペラゲエヤがやつて来てせき立てる。二人は口を探しに町へ行かうとしてゐる。

『お慈悲にどうぞ一錢やつて下さい、』とお袋は逢ふ人毎に言ふ。『お慈悲でござります、お情深い旦那様！』

『子供をこつちへお呉れ』と覺えのある聲が叫ぶ。『子供をお呉れつてば、』と同じ聲が今度は怒つて鋭く繰返す。『何だ眠つてるんか、畜生！』

ワアルカは飛び上つて、あたりを見まはしながら、ふと自分が何處にゐ

るかを想ひ出す。其處には道もなければ、ペラゲエヤも人々もゐはしない。たゞ子供に乳をやりに来た上さんが、部屋のまん中に立つてゐるばかりである。岩乗な、肩幅の廣い女が赤子に乳をやつてすかしてゐる間、ワアルカはちつと立つて上さんの方を見ながら、それが濟むまで待つてゐる。すると窓の外は空が白んで来て、影は薄れ、天井の緑色の點は蒼ざめる。間もなく朝となるのであらう。

『そら、お取りよ、』と上さんは寢巻のボタンを掛けながら言ふ。『泣いてゐるんだ。どうかしてるんだよ！』

ワアルカは子供を取つて、搖籠に置いて、またゆるがし始める。影と緑色の點とは消え去つて、今はもう頭を動かすやうな物は何もない。けれど、も以前のやうに、彼女は眠たいのである、たまたまなく眠たいのである。ワ

アルカは頭を揺籠の縁に載せて、眠氣を追ひ拂はうとするやうに身體全體でそれをゆるがす。けれども臉はまた垂れて、頭は重たくなる。

『ワアルカ、ストオヴを焚け！』と戸の向うから主人の聲が響いて来る。

即ち——起きて其の日の仕事を始める時にとう／＼なつたのである。ワアルカは揺籠の所を去つて物置へ薪を取りに走る。嬉しいのだ。走るか歩くかしてゐる時は、坐つてゐる時ほどにひどく眠たくは感じない。彼女は薪を持つて来て、ストオヴを焚き附ける、と其の化石した顔がどんなに覺めて来るか、其の考がどんなにはつきりして来るかが分る。

『ワアルカ、サモワルの支度をおしよ！』と上さんが叫ぶ。

ワアルカは薪のこツぱを切つて、やつと焚きつけて、サモワルの下に置く。と別の命令が来る——

『ワアルカ、旦那の表靴をお磨きよ！』

ワアルカは床に坐つて、表靴を磨きながら、この大きな、深い表靴の中へ頭を突き込んで、ちよつとでも眠つたなら、どんなにか嬉しからうと思ふ。……と不意に表靴が大きく、膨らんで、部屋一ぱいになる。ワアルカはブラツシユを落す、が直ぐに頭を振り、目をぐつと開いていろ／＼な物が大きくもならなければ、動きもしなかつたのをよく見定めようとする。

『ワアルカ、外の上り段をお洗ひ……お客様が氣を悪くなさるよ！』

ワアルカは上り段を掃除し、部屋を片付け、それから別のストオヴを焚いて、店の方へ駆けて行く。其處にもせねばならぬ仕事は澤山あつて、少しも隙な時はない。

けれども何がといつて、臺所のテーブルに向つてジャガ薯の皮を剥くは

ど退屈たいくつなことはない。ワアルカの頭あたまはテエブルの上うへに垂たれ、ジャガ薯いもは目先まきでちらくし、ナイフは手てから落おちる。そして傍そばには岩乗がんじやうな、ぶりくしてゐる上かみさんが兩袖りゆうそでをたくし上げて、忙せしく立ち働はたらきながら、ワアルカの耳みみにがんく鳴なり渡るやうな高たかい聲こゑでしやべつてゐる。また食しょくじ事の給仕きんじをしたり、洗濯せんたくをしたり、縫ぬひ物ものをしたりするのも辛つらい。さういふ折せうには、身のまはりに何なにがあらうと一切頓着さいとんぢやくせず、長々ながくと床ゆかの上に横よこになつて眠ねりたいと思おもふ時ときがある。

其そのの日は暮くれる。と窓まどの暗くらくなつて行くのを見守みまもりながら、ワアルカは化石くわせきしたやうな顛顛てんてんを抑おさへて、何故なぜかは自分じぶんでも知しらずに、につこりする。暗闇くらやみは閉とちかけてゐる臉まはたを撫なでて、間まもなく熟睡じゆくすいの出來できる約束やくそくをする。所ところが晩ばんになると靴屋くつやの部屋へやは一いぱいの客きやくである。

「ワアルカ、サモワルの支度したくをおしよ！」と上かみさんが叫さけぶ。

サモワルは小ちひさいので、客きやく人が茶ちやを飲のみ飽あきるまでには、五遍ごへんも一いぱいにして沸わかさなければならぬ。茶ちやの後あとで、ワアルカは一ひとつ所ところに一じかん時間も立たつて、客きやくの方ほうを眺ながめながら命めい令れいを待まちつてゐる。

「ワアルカ、駈かけて行いつてビールを三本買さんぽんかつてお出いで！」

ワアルカは自分じぶんのゐた所ところから飛とび上あつて、睡氣ねむけを追おひ拂はらふ爲ために出來でるだけ早はやく駈かけて行いく。

「ワアルカ、ウオツカを取とつてお出いで！ ワアルカ、栓せん抜きは何處どこにある？ ワアルカ、鯡にしんをお洗あらひ！」

やつこのことことで客きやくは去さり、火ひは消けされ、主人しゆじんも上かみさんも寢床ねどこへ行いく。

「ワアルカ、搖籃ゆりかごをおゆり！」と最後さいごの命めい令れいが響ひびく。

ストオヴの中では蟋蟀が啼き、天井の緑色の點と、ズボンと赤子の着物の影とは、またワアルカの半ば開いた目先をちらくして、目配せして、頭をぼんやりさせる。

『ねんねんよう、おころりよ、』と彼女はつぶやく、『お守はお歌を唄ひましよ……』

所が子供は泣いて、泣きつかれてゐる。ワアルカはまたぬかつた道や、小靴を脊負つた人だちや、ペラゲエヤや、親爺のイエエフイムやを見る。彼女はそれをみんな想ひ出しもすれば認めもするが、半ば睡つてゐるので、自分をぞんぶんに縛つて、押しつぶして、生命を滅してしまふ力は分らない。彼女は身のまはりを眺め、その力を探してそれから身を逃れようとする。けれどもそれが見付けられない。そこでとうく、苦し紛れに、力を

籠め目を見張つて、目配せしてゐる緑色の點を見上げる。そして赤子の泣聲を聞くと、彼女は自分の胸を押しつぶさうとしてゐる敵を見付ける。

敵は子供である。

ワアルカは笑ふ。呆れる。どうしてこんなたわいもないことが今まで分らなかつたのか？ 緑色の點も、影も、蟋蟀も、みんながにこくして、そして、びつくりしてゐるやうに見える。

ある考がワアルカを捕へる。彼女は腰掛から立ち上つて、瞬きもせぬ目をして無遠慮に笑ひながら、部屋の中を行つたり來たりする。自分をぞんぶんに縛り付けてゐた子供から、間もなく救ひ出されようといふ考で喜んだり感動したりしてゐる。子供を殺して、それから眠るんだ、眠るんだ、眠るんだ……

でにこくしたり、瞬^{また}きたしたり、指^{ゆび}で緑^{みどりいろ}色の^{てん}點^{おひや}を脅^{おびや}かしたりしながら、
ワアルカは搖籃^{ゆりかご}に忍^{しの}び寄^よつて子^こ供^{ども}の上^{うへ}に屈^かむ。…そして子^こ供^{ども}の息^{いき}を止^とめ
てしまふと、床^{ゆか}の上^{うへ}にしやがんで、そして、眠^{ねむ}ることが出^で來^きると思^{おも}ふと嬉^{うれ}
しくて笑^{わら}ひながら、間^まもなく死^しんだ子^こ供^{ども}と同^{おな}じやうにぐつすり^{ねむ}と眠^{ねむ}る。

1915.5.22

ジ
イ
ノ
チ
カ

ジイノチカ

或る百姓家の刈り立ての乾草を寢床に、遊獵者の一行が泊つた。月は窓から覗き込んで、外では、手風琴が物悲しげに鳴つてゐた。乾草は重苦しい、いらいらする香を吐いた。遊獵者達は犬の事、女の事、初戀の事、鴉の事などを話した。みんなが銘々の知つてゐるすべての女の事を些細な點まで話し合つて、様々の物語をした時に、一行の中で一番肥つた、暗闇の

中ではまるで乾草堆のやうに見えた、參謀官らしい厚みのある聲で話した男が、耳につくやうな欠をして、そして言つた――

『要するに、愛されるといふことには別段何も不思議はないさ。女は其の爲めにのみ――吾々男子を愛する爲めにのみ存在してゐるんだからな。所でどうだ、諸君の内誰か心から憎まれたことを――無暗に、悪魔が憎むやうに憎まれたことを自慢の出来る者があるか？ 誰か夢中になつて憎んだのを一度でも見たことがあるか？ え？』

答はなかつた。

『僕はあるまいと思ふ、』と參謀官の低言が続けた。『僕だけは其の経験を持つてゐる。僕はある娘に、ある綺麗な娘に憎まれた。そして、僕のこの身體で、初憎みのあらゆる徴候を研究した。僕は「初」といふ、諸君、それ

は初戀の反對だからである。尤も本當からいふと、僕がこの妙な經驗を得たのは、まだ戀とか憎みとかいふことについては、何の極つた考も持たなかつた時分のことだ。やつと八つの時だつたからな。併しそんな事はどうでもいゝんだ。話の中心は其の娘なんだから。まあ……聴きたまへ！

『ある晴れた夏の夕方、日の暮れる前に、僕は女教師のジイノチカといふ學校を出たばかりな、素敵に美しい、ロマンチックな奴と一緒に、子供部屋で日課をやつてゐた。ジイノチカはぼんやりと窓から外を見ながら僕に言つた――

『さうです、私達は酸素を吸ひます。それで、ペエチャ、私達は何を吐きまします？』

『「炭酸瓦斯、」と僕もまた窓から外を見ながら答へた。

「さうです」とジイノチカは言った。植物は、これに反して、炭酸瓦斯を吸つて酸素を吐きます。炭酸瓦斯はゼルツエル水の中にもサモワルの煙の中にも含まれてゐます。……大變危険な瓦斯です。ネエブルスの近くに犬の巖窟と云つて、その一ぱいに充ちてゐる所があります。若し此の巖窟の中へ犬を入れようものなら直ちに息が詰つてしまひます。」

「ネエブルスの近くの此の不吉な巖窟といふのは、どんな女教師でも決して忘れなかつた物理上の一つの現象であつた。ジイノチカはいつも僕に自然科學の價値を強く吹き込んだけれど、御當人はそれらの犬の運命の外は化學に就いては何も知らなかつた。」

「彼女は今までの事を繰返すやうにと僕に言つた。僕はそれを繰返した。すると今度は、「地平線は何ですか？」と訊いた。僕は答へた。僕等が地平

線で忙しかつた時に、親爺は庭で獵に出掛ける支度をしてゐた。犬は鼻を鳴らし、馬は待ち切れずに腕いた。召使達は四輪馬車に一ぱい食物の袋を積んだ——あらゆる種類の旨いものだ！ 四輪馬車の傍には内の二人乗の四輪馬車が、母と妹達とをイワニスキイの内へ誕生祝に乗せて行かうとして待つてゐた。みんなは何處へか行かうとしてゐて、残るのは僕と、外には、恐ろしく齒が痛むと云つてこぼしてゐた兄貴だけだ。諸君は僕の羨しさど詰らなさを想像することが出来るだらう。

「さう……で、私達が吸ふのは何ですか？」とジイノチカは窓から外を見ながら訊いた。

「酸素。」

「さうです。そして地平線といふのは、地球が空に接してゐるやうに見える

る處のことです。」

「所が此處で四輪馬車が軋り出して、その後から二人乗がついた。僕はジイノチカを見た。そして彼女がポケットから紙片を取り出して、それを強く揉みくちやにして、額へ押し付けたのを見た。彼女はさうした時にふつと顔を上げて柱時計を見た。」

「さう……覚えていらつしやい」と彼女はまた續けた。「ネエブルスの近くに犬の巖窟といふのがあります……」——此處でまた柱時計を見てそして續けた——「地球が空に接してゐるやうに見える所のことです。」

「可哀さうなジイノチカは、ひどくそわそわしながら部屋の中を往つたり來たりして、そして頻りに柱時計を見た。けれども僕の日課は、まだ半時間續くことになつてゐた。」

「算術をおやりなさい」と彼女は重く呼吸をして、震へる手でペエジを繰りながら言つた。「問題三百二十五番を解いて御覽なさい。私直ぐに歸つて來ますから。」

「ジイノチカは部屋を出て行つた。僕はばた、ばた、と梯子段を降りて行くのを聞いた。そして直に、其の藍色の着物が庭をちらツと通つて、花園の門で消えたのを窓から見た。其の取りのぼせた身體のこなしや、頬の赤かつたことや、ひどくそわそわしてゐたことや、僕の好奇心を喚び起した。何處へ何しに行つたのだらう？　僕は年の割にませてゐたから、少し考へてゐるうちに何もかもすつかり分つた。嚴しい両親の留守をいゝことにして、黒母を盗みに行つたのか、でなければ、多分櫻ン坊を摘みに行つたに違ひない。さうだとすれば、何の俺だつて、構ふものか！　行つて櫻

ン坊を摘んでやらう。僕は教科書を抛り出して花園の中へ駆けて行つた。櫻の木のを最初に目掛けて行つて見たが、ジイノチカは見えなかつた。彼女は黒莓にもグウズベリにも目を呉れずに、番人小屋をも通り越して、顔と云へば死んだやうに蒼ざめて、ちよつとした物音にも氣を置きながら池の方へ歩いて行く所であつた。僕はこつそりと後から見付からぬやうにつけて行くと、諸君、實にびつくりするやうな光景を見た！ 池の傍の二本の古い柳の幹の間に、兄貴のサアシヤが齒なんか毛ほども痛さうもない景色で立つてゐた。兄貴は近付いて来るジイノチカを見た。其の顔中はまるで太陽のやうに、有頂天な喜びで輝いてゐた。所でジイノチカは、さながら犬の巖窟へ炭酸瓦斯を吸ひに追ひ込まれでもしてゐるやうに、やつと息をしなから、頭を頂垂れたまゝで、そろりそろりと兄貴の方に歩んだ。すべ

杏

ての様子で、これが彼女の生れて始めての逢引であつたことが分つた。間もなく彼女は兄貴の前に立つた。そして暫くの間、二人は自分達の目を信ずることが出来ないものゝやうに黙つてちつと互ひに見合つてゐた。……とやがて何か目に見えない力がジイノチカを後から押すやうに見えた。彼女は手をサアシヤの肩に置いて頭を其のちよつきに押しつけた。大膽なサアシヤは微笑して、何かとりとまりもないことを吐いた。そして惚れ込んだ男の不器用な恰好で、兩手をジイノチカの顔にかけた。と其の時、諸君どうだ！……今しも其の後に太陽が沈まうとしてゐた小山も、二本の柳の木も、緑の岸も、空も——すべてのものが池に影を映してゐた。しいんとしてゐた……諸君はそれを想像することが出来るだらう！ 菅の上には長い鬚を持つた無数の金色の蝶が飛んでゐた。花園の向うには羊飼が羊の群

一九二

を追つてゐた！ それは實に書だつた！
 「けれども僕が見たものの内で、僕に分つたのは唯だ一つだつた。サアシヤがジイノチカにキスしてゐたことだ！ 怪しからん！ もしお母さんにも知れて見ろ。さんん、叱られるに違ひない。僕は氣恥かしくなつたので、子供部屋に歸つて、それきり逢引の方は見なかつた。僕は年の割にませてゐたから、教科書の上にかゝんで、考へて、筋道をつけた。と僕の顔は勝利の微笑で輝いた。先づ第一に、人の秘密を握るといふことが利益であつたと同時に、権力のある者が、例へばサアシヤとジイノチカとのやうなものが、世間の禮儀に缺けた姿で見付けられたといふことが嬉しかつたのだ。もはや二人は僕の手中に落ちた。これから以後の二人の平和は、懸つて僕の量見一つにある。今に見てゐるがいゝ！

「寝る時間の來た時に、不斷の通りにジイノチカは、僕が祈りを上げたか、着物のまゝで寢床に入りはしなかつたか、を確めに子供部屋へ來た。僕は其の綺麗な晴々とした顔をちつと見て、にやりと笑つた。秘密が僕の身體を裂いて出口を求めたのだ。僕は少しづつ、臭はして、其の利き目を楽しんだ。

「へえ、知つてるよ！」と僕は始めた。「へえ！」

「何を知つてるのです？」

「へえ！ 僕は見たんです。あなたが柳の蔭でサアシヤとキスしたのを。

あなたの後から行つて見てゐたんです！」

「ジイノチカはびつくりして火のやうに眞赤になつた。僕の言葉で口が利けなくなつて、コップと燭臺との載つてゐた椅子にぐたりと腰を落した。

「僕は見たんです、あなたとサアシャと……キスしてゐるのを……」と僕は、片足でびよん／＼跳ねながら、彼女の困つてゐるのが嬉しくつて繰返した。「へえ！ 待つてお出でなさい、今にお母さんに言ひつけてあげるから。」

「始めジイノチカは向きになつて恐ろしさうに僕を見た。するうちに、僕が實際何もかも知つてゐたことが分つて來ると、がっかりしたやうに僕の手を掴んで、顫へながら叫んだ——」

「ペエチャ、それは賤しいことです……お願ひですから！ どうぞ！ 男らしくねえ……何にも言はないで下さい……正直な子は探偵なんぞするものではありません。それは賤しいことです。お願ひですから！」

「可哀さうなジイノチカは僕の母を火のやうに恐れた。一體僕の母は貞淑

な、高尚な主義で固まつた女だつた。それが彼女の恐れた一つの理由だ。第二は言ふ迄もなく、僕のにやりと笑つた鼻先が、清い、ロマンチックな初恋の神聖を汚したやうに見えたのであつた。諸君は彼女の心持を想像することが出来るだらう！ 僕のおかげで、彼女は確に一晚眠らずにゐたに違ひない。翌朝、朝飯に出て來た時は、目のまはりに、青黒い隈が付いてゐた。……朝飯の後で、僕はサアシャに出會した時、ついにやりと笑つて自慢してやらうといふ誘惑を抑へることが出来なかつた。

「へえ！ 知つてるよ。僕はね、兄さんがジイナさんにキスしたのを見たんだよ！」

「サアシャは僕をちつと見てそして言つた——」

「馬鹿！」

「兄貴はジイノチカのやうに容易く嚇かされる柄でなかつたので、手應へがなかつた。それが僕を失望させた。サアシャがさうまで大膽であつたのはつまり僕がキスを見たことを信じなかつた證據なんだ。併し、待てよ、俺はそれを證明することが出来るんだぞと、僕は自分で感めた。其の朝日課の時に、ジイノチカは目を脇に外らしたまゝで、絶えず口籠つてゐた。

「彼女はもはや恐れてゐるやうな様子を見せなかつた。却つて僕を丸め込もうとして、何にでも満點を呉れたり、又、一度だつて僕のいたづらを親爺に言ひつけようとはしなかつた。僕は年の割にませてゐたから、女の秘密を自分の役に立つやうに利用してやつた。日課は少しも學ばないで、教室には逆立ちをして這入つたり、随分無作法な真似までした——早い話がもしあの儘で今日まで續けて來たら、僕は屹度立派なゆすりになつてゐた

に違ひない。所がたつた一週間経つた。秘密は僕をいら／＼させて苦しめた——それは靈魂の刺であつた。結果などには無頓着で、僕はもうそれを外に出して其の利き目を樂まうとする衝動と戦ふことが出来なくなつた。ある日正餐の席で、客の澤山ゐた時に、僕はもち／＼しながらにやりと笑つて、ジイノチカの方をちらりと盗むやうに見ると口を切つた——

「へえ！ 知つてるよ……僕は見たんだよ……」

「何を見たのです？」と母が訊いた。

「僕はまたジイノチカの方をちらりと盗むやうに見て、それからサアシャを見た。するとジイノチカは眞赤になつて、サアシャは怖い目付をしめるではないか！ 僕は舌を噛んでそれきり何もいはなかつた。ジイノチカはだんだんと顔色が青くなつて、齒を食ひしばつて、何も食へなかつた。

其の夕方、下稽古の時に、僕はジイノチカに不意の變化がおこつてゐたことに気が付いた。顔はきつく、冷たく、大理石のやうになつて、目は異様な表情を持つてゐた。僕は斷言するが、狼を食ひ裂く時の犬にだつて、決して、あんなに無残な、何もかも食ひ盡さうとするやうな目付を見たことはなかつた。僕は直きに其の表情が何を意味してゐたかを知ることになつた。日課の中ほどで、ジイノチカは齒を食ひしばつて押し出すやうに言つた――

「私はおまへが大嫌ひだ！ 悪黨、胸の悪い畜生、なんて憎らしいだらう。なんて其の五分刈頭の、恥知らずの驢馬の耳が憎らしいか知れない！」

「所が、彼女は直きにはつと気が付いて言ひ續けた――

「あなたのことぢやありませんよ。ただせりふのいくさりを誦誦したばかりですよ……」

「それから後といふものは、諸君、彼女は毎晩僕の寢床に来て、ぢいツと僕の顔を見た。無暗に僕を憎んだのだ。けれども彼女は僕がなくては暮らせなかつた。兎に角、僕の憎い顔を見守るのが彼女に取つて必要らしかつた。それから僕が覺えてゐるのは、氣持のいゝ夏の夕方のことだ。乾草の匂ひがして、静かな、といふやうな晩だつた。月が照つてゐた。僕は櫻ヂヤムのことを考へながら、花園の小徑を降りて行つた。と不意に僕の前へ蒼白い、綺麗なジイノチカが来て、ぐいと僕の腕を掴むと、息をはづませながら、其の感情を吐き出した。

「えゝツ、何て憎らしいだらう！ 私は今までこんなに人を悪く思つ

たことはありはしない！ 私の言ふことが分りやあいゝ！」

「諸君はそれを想像が出来よう！ 月に、憤怒を吐く蒼白い顔に、しいんとした静けさだ……所で、僕は其の時分小豚のやうだつたが、ひどく其の趣が氣に入つた。ジイノチカの言ふことに聞き入つて、其の目をちつと眺めてゐた。……始めは嬉しかつた。といふのは、珍らしかつたからだ。が少し経つと、急に恐ろしくなつた。僕はきやつと聲を立て、家の中へ駆け込んだ。

「僕はもう母に言ひ付ける外はないと心を極めた。で、言ひ付けた上に、どうして僕がサアシャとジイノチカとがキスしてゐるのを見たかといふことを話した。僕は馬鹿だつたから、其の結果を見越せなかつた。でなければ黙つてゐたさ。……母は僕の話を知ると、眞赤になつて怒つて、そして

言つた――

「そんな事を話すのはお前の役目ではありません。……お前はまた子供ぢやありませんか。けれども子供達に何といふ手本だらう！」

「僕の母は貞淑であつたばかりでなく、また分別にも富んでゐた。母は世間の口を避けるに力を盡した。で、ジイノチカに暇をやるにも直ぐにではなく、だんだんと、筋道を立て、丁度世間の人が立派ではあるが面倒な客を敬して遠ざけるやうにした。僕は今でも覚えてゐるが、ジイノチカがいよいよ出て行く時に、其の最後の視線は僕が坐つてゐた窓に向けられた。諸君、僕は今日でも其の目付をちやんと覚えてゐる。

「其の後間もなく、ジイノチカは兄貴の妻になつた。即ち諸君がみんな御存じのジネエダ ニコライエフナだ。僕はそれから、一廉の若殿になるま

では二度と彼女に逢はなかつた。髭の生えた士官の姿に、憎いペエチャを
 見付けることは彼女に取つてむづかしかつた——けれども、彼女の僕に對
 する態度は、全く親戚の態度ではなかつた。……そして今日でさへ、僕が
 この愛嬌のある禿頭や、平和な恰好や、やさしい目付をしてゐるに拘らず、
 ジイノチカはいつも少し後目にかけて僕を見るし、又、僕が兄貴を訪問す
 ると氣色が悪いやうだ。……して見れば初憎みといふ奴も、初戀と同じや
 うに中々忘れられないものであることが分る。……おや！　もう鶏が鳴い
 てゐるせ。お休み！』

牡

蠣

牡
蠣

強ひて思ひ出さうとするまでもなく、雨の降つた薄明るい秋の晩に、親爺と一緒に賑やかなモスコウの街に立つてゐて、變な病氣に罹つたやうな氣のした時のことが胸に浮んで來る。何處といつて苦しい所はなかつたが、脚は進まず、頭はたわいもなく一方に垂れて、言葉は咽に引ツついた。私は直ぐにも舗石の上に倒れて氣絶しさうな氣がした。

もし其の時病院に入れられたなら、醫者はきつと私の床の上に、「飢餓」といふ——醫學の本には不斷使はれてゐない病名を書いたであらう。鋪石の上の私の傍には、親爺が、摩り切れた夏外套に、白い綿のはしのはみ出してゐる辨慶縞のシャツボをかぶつて立つてゐた。足には大きな不細工の表靴を穿いてゐた。見え坊の人だつたから、人が其の大きな表靴の下に、長靴も靴下もないのを見はしまいかと恐れて、古いゲートルで脚を包んでゐた。

この哀れな不器用な人は、五ヶ月前に書記の口を探しに首府に出て來たので、私は一度は意氣であつた其の夏外套がぼろ／＼になつたり汚なくなつたりすればするほど、いよく其の人を大事にした。五ヶ月の間、親爺は口を探して市中を歩きまはつたが、今日といふ今日、始めて勇氣を絞り

出して、街で物をしようとしたのであつた。

私達の前には大きな三階建の家が立つてゐて、青い看板には「御料理」としてあつた。私の頭はたわいもなく後ろへ垂れて、また一方へ垂れた。思はず私は煌々としてゐる料理屋の窓を見上げた。窓の向うには人影がちらついた。右の方にはオオケストリオン（簡琴に似た）と、二枚の油畫風の石版畫と、釣ラムプとがあつた。で其のぼつとしてゐる所を見きはめようとしてゐるうちに、私の目は白い繼の上に落ちた。繼は動かさずにゐて、其の四角い輪廓は暗褐色の地色の上に際立つて浮き出してゐた。私は目をちつと据ゑた時に、其の繼は壁の上のびらであつて、それには確かに何とか印刷されてあつたことは分つたが、其の何とかが何であつたかは分らなかつた。私は目を其のびらの上に少くとも半時間は据ゑてゐたに違ひない。其の

白いのが相圖をして、殆ど私の腦を睡らしたやうに見えた。私はそれを讀まうとつとめたが、どうしても駄目だった。

所がとうとう、其の變な病氣が昂じて來た。

往來のどよめきは雷鳴のやうに起つた。街の匂ひのうちに私は無數の匂ひをかぎ分けた。料理屋の明りと街のラムプとは電光のごとくきらめくやうに見えた。そして私はそれまで分らなかつたことが分り出した。

『牡蠣』と私はびらを讀んだ。

變な言葉だ。私はすでに八年と三ヶ月此の世の中に生きて來たが、一度もこんな言葉を聞かなかつた。何の事だらう？ 主人の名前だらうか？ いや、主人の名のある看板なら戸の外に懸つてゐべきで、家の中の壁の上にあるはずがない。

『おとうさん、牡蠣つて何？』私は顔を親爺の方へ向けようとしながら、しはがれ聲で訊いた。

親爺は私の言つたのを聞かなかつた。彼は群集の流れの方を眺めて、あらゆる通行人を目で追つてゐた。その顔を見ると、親爺は通行人に言葉をかけようと切に望んでゐたが、其の死ぬほどつらい重い言葉は顛へる唇に引つかゝつて、どうしても離れなかつたことが分つた。一人の通行人を引きとめて、其の袖に觸れまでしたが、其の人が振り向くと、親爺は、『御免下さい、』と口の中で言つて、まごつくしながら後しざりした。

『おとうさん、「牡蠣」って何の事なの？』と私はまた訊いた。

『一種の動物だよ。…海の中に住んでゐる…』

すると、一瞬きをするうちに、私はこの不思議な動物を目に浮べた。何かかう魚と蟹との間のやうなもの、に違ひない、と私は極めた。それが海から来ると、きまつて旨い御馳走になるに違ひない。香ばしい胡椒の實とロオレルの葉とを入れた熱いプウヤアベエスとか、軟骨を入れたり、蟹ソオスをかけたりした酸っぱいソリアンカとか、山葵をつけた冷たいやつとか：：私はその魚が市場から持つて来られると、綺麗にされて、手早く、手早く、といふのは誰しも腹がへつてゐるから、：：恐ろしく腹がへつてゐるから、：：手早く鍋の中へ押し込まれるさまを、あり／＼と目の前に描いた。料理屋の臺所から煮肴と蟹スープとの匂ひが来た。

この匂ひが私の上顎と鼻の孔とを擦り初めた。私はそれが身體ぢゆうに染み込むやうな気がした。料理屋も、親爺も、白いびらも、私の袖もあら

ゆるものが強くそれを吐き出したので、私のもぐ／＼噛み初めた。私は自分の口が、其の海の中に住んでゐるといふ變な動物で本當に一ぱいになつてゐてもしたやうに、噛んで呑み込んだ：：

其の快樂が私の力には強過ぎた。私は倒れまいとして親爺のカフスを掴んで、其の濡れた夏外套に寄りかゝつた。親爺は身震ひした。寒かつたのだ：：

『おとうさん、牡蠣は精進日でも食べるの？』と私は訊いた。

『生きたまゝ食べるんだよ：：』と親爺は答へた。『殻の中にあるものだ：：。龜のやうにな、たゞ殻は二重になつてゐる。』

誘惑するやうな匂ひが不意に鼻の孔を擦るのを止めた。と、幻想は消えた。今こそ分つた！

『こわいなア!』と私は叫んだ。『いやだなア!』

そんなものが牡蠣だつたのか! けれども、いやなものではあつたが、私の想像力は彼等を描くことが出来た。私は蛙のやうな動物を想像した。蛙が殻の中に坐つて、大きな、ぎら／＼する目を見張つて、其の憎々しい顎を動かした。一體この世の中でやつと八年と三ヶ月生きて来たばかりの子供に取つて、これより恐ろしい事があり得ようか? フランス人は蛙を食べるといふことだ。が子供達は——決してだ! と私はこの魚が、其の殻のまゝで、爪や、ぎら／＼する目や、びか／＼する尻尾を持つたまゝで、市場から運ばれて来るのを見た。……子供達はみんな隠れてしまふ。と料理人は、むかつきさうに瞬きしながら、其の動物の爪をつかんで、皿の上に乗せて、食堂へ持つて行く。大人の人達はそれを取つて食べる……生き

たまゝで、目をも、歯をも、爪をも食べる。するとそれがしゆうと言つてみんなの唇を噛まうとする。

私は胸が悪くなつて顔をしかめた。だのになせ私の歯は噛み出したのか? 胸の悪い、いやな、恐ろしい動物、でもなほ私はそれを食べた、其の味と匂ひとに氣のつくのを恐れながら、がつ／＼と貪り食べた。私は想像で食べた。と神経は緊張するやうに見え、心臓は強く打つた。……一疋済んでしまふと、すでに二疋目、三疋目のぎら／＼する目が見えた。……私はまたそれをも食べた。終にはナブキンをも、皿をも、親爺の表靴をも、白いびらをも食べた……目の前にあるあらゆるものを食べた。といふのは、たい食べさへすれば病氣を癒せるやうな氣がしたからである。牡蠣は其のぎら／＼する目で恐ろしく睨みつけて、私の氣持を悪くした。私は彼等の

ことを考へると身震ひしたが、でも食べたかつた。食べたい！

「牡蠣を頂戴よ！ 牡蠣を頂戴よ！」といふ叫び聲が私の唇から迸つた。そして、私は両手を差し延べた。

「旦那、一錢やつて下さい！」私は不意に親爺の勢のない、息の詰つた聲を聞いた。「お恥かしい次第ですが、迎ももうたまりません！」

「牡蠣を頂戴よ！」私は親爺の外套の裾をつかみながら叫んだ。

「なんだ牡蠣を食べると！ こんな小さい小僧が！」私はそばでかういふ聲を聞いた。

私の前にはシルクハットを冠つた二人の人が立つて、笑ひながら私の方を見た。

「この小さい小僧が牡蠣を食べるといつてるといふんか？ え！ これや

ア面白い！ どうして食べるか知ら？」

私は強い手がぎら／＼してゐる料理屋の中へ私を曳きすり込んだのを覚えてゐる。すぐに澤山の人が寄つて来て、珍らしさうに且つ面白さうに私を見た。私はテーブルに坐つて、何かかう滑らかな、水氣のある、微びてるやうな物を食べた。私は噛みもしなければ、見ようともせず、何を食べてゐるかを知らうともせず、がつ／＼と食ひ食べた。もし目を開かうものなら、直ぐにぎらぎらする目や、爪や、鋭い歯などを見なければなるまいと思はれた。

私は何か固いものを噛み初めた。がり／＼と噛み砕く音がした。

「やあ、此奴は殻を食べてやがる！」と皆が笑つた。「馬鹿だなあ、牡蠣の殻を食べる奴があるものか？」

その後で、私はたゞ恐ろしく渴いたことを覚えてゐる。寢床に這入つてからも、腹が一ぱいなのと、熱い口の中で變な味がするので目が覺めてゐた。親爺は部屋の中を行つたり來たりして身振りをしてゐた。

『風を引いたらしい!』と彼は言つた。『どうも頭の中が變だ。…何か中にありでもするやうだ。…が多分これやアたい。…今日一日何も食へなかつたせらだらう。おれは全く變だつた。…馬鹿だつた。おれはあの紳士達が牡蠣の代を十ルウブル拂つてゐるのを見た。なせおれも行つて、貸で…何かを呉れるやうにと頼まなかつたのだ? 屹度あの人達はさうして呉れたに違ひない。』

明け方になつて私は眠つた。そして蛙が殻の中に坐つて、目をぱちくりしてゐる夢を見た。晝頃咽が渴いて目が覺めた。親爺はと見ると、やはり

部屋の中を行つたり來たりして身振りをしてゐた。

1915.5.22

黑
坊
主

黒 坊 主

一

博士アレドレイエ ワシリエエキツチ コウリンは、過勞の結果、神經衰弱になつた。正則な治療を受けようとはしなかつたが、ある時一ぱい飲みながら、ふと友人の醫者に話した。すると友人の醫者は、春と夏とをす

つと田舎で暮らすやうにと勧めた。所へ丁度折よく、タアニヤ ペンオツキイから長い手紙が来て、ボリソオフカへ来て父と一緒にゐて呉れるやうにと頼んで来た。彼は行くことに極めた。

けれども彼は先づ（それは四月のことであつた）自分の領地へ、自分の生れ故郷のコウリンカへ行つて、獨りで淋しい三週間を送つた。そしてやつと好い天気になつた時に、以前の後見人で第二の親のペンオツキイといふ、名高いロシアの園藝家の所へ、田舎を通つて馬車を驅つた。コウリンカからペンオツキイ家の故郷のボリソオフカまでは約七十露里の距離があつた。氣持よく踊る幌馬車で、長閑な春の日に其の道を驅つて行くのは、どんなにか楽しい思ひをさせた。

ボリソオフカの家は大きくつて、前に柱廊を取りまはした上に、石膏の

落ちかけた幾つかの獅子像で飾られてゐた。其の戸口には仕着を着た召使が立つてゐた。イギリス風に設計された、陰氣でいかめしい古い邸園が、家から川の方へ約一露里位だら／＼下りに廣がつて、其の果ての峻しい粘土の土手には、兎毛の足に似た裸根の松の木が澤山生えてゐた。下には淋しい流れがきら／＼と光り、上には鶴が沈鬱な聲を立てながら飛びまはつてゐた——すべてが、一口に言ふと、客の心を誘つて、腰をおろして小歌を作らせるやうに思はれた。所が花園と果樹園とは、苗床と共に八十五エカア位を占めてゐたが、全く異つた感じを起させた。天氣のこく悪い時でさへ、晴々と輝いて嬉しい氣持をさせた。かやうな珍らしい薔薇や、百合や、椿や、チュウリップや、目覚めるやうな白から煤のやうな黒に至るまでのありとあらゆる色と種類との無数の開花植物や、——かやうな花の富をばこ

ウリンはいままで曾て見たことがなかつた。春はまだ始めてあつたから、非常に珍らしいものはガラスの下に隠されてゐたが、すでに小徑や苗床には、可愛い影の國を形つくるに足るだけの花は咲いてゐた。そしてすべてのもの、最も美しいのは、朝早く、露の玉があらゆる花瓣と葉との上にきら／＼と輝いてゐる時であつた。

少年時代に、ペンオツキイに『屑』と侮蔑して呼ばれてゐた、花園の裝飾的部分は、コウリンに無稽な印象を與へた。何といふ人工の奇蹟だらう、何といふわざとした畸形だらう、何といふ自然の嘲弄だらう！ 果樹の樹牆も、ピラミッド形のポプラのやうに作られた梨の木も、球状の榿と科の木も、林檎の木の家も、アアチも、モノグラムも、枝附燭臺も——ペンオツキイが始めて園藝の道に携はつた年を記念する爲めに梅の木に付けた一〇〇〇

の日附までも。また堂々とした、釣合のいゝ木で、幹が棕梠のやうにまっすぐに立つてゐるのをよく見ると、それはグウズベリ即ち赤すぐりの木であることが分つた。けれども中でも最も花園を生々させで、それに陽氣な調子を與へたものは、ペンオツキイの園丁等が絶えず動いてゐることであつた。朝早くから晩まで、木のそばにも、藪のそばにも、小徑にも、又苗床にも、手車や、鋤や、如露を手にした人達が、蟻のやうに忙がしさうに群つてゐた。

コウリンは九時にポリソオフカへ着いた。彼はタアニヤと父親との恐慌してゐるのを見た。晴れきつた星月夜が霜を豫示してゐたが、園丁頭のイワン カアルリツチが町へ行つてゐたので、後には頼みになるやうな者が誰もゐなかつた。晩飯の時にも、彼等はたいさ迫つてゐる霜のことばかり

を話した。そして結局、タアニヤは全く寝ずになつて、一時になつたら花園を見まはつてすべてのことが順序よく行つてゐるかどうかを見ること、イエゴオル、セミオノキツチは三時か、或はもつと早く起きることに極つた。

コウリンはずつと其の晩タアニヤと一緒に坐つてゐて、夜中を過ぎると花園へ連れ立つて行つた。空気は既に物の燃える匂ひが強かつた。「商賣園」と名の付いた、毎年イエゴオル、セミオノキツチに數千ルウブルの利益を得させる大きな果樹園には、既に、若葉を蔽うて植物を救ふことになつてゐる濃い黒い酸っぱい煙が地上を這つてゐた。樹木は一列にした象棋の駒のやうに——兵士の列のやうに整列してゐた。この利いた風な齊整と、高さの均一とが相俟つて、花園を單調な退屈なものにさへ思はせた。コウリンとタアニヤとは小徑をあちこちと歩いて、糞や、藁や、巻藁などの燃え

る火を見たが、煙の中を影のやうに歩きまはつてゐる人夫達には稀にしか逢はなかつた。たゞ櫻と梅の木と僅かな林檎の木とは花が咲いてゐたが、花園は全く煙に包まれてゐて、コウリンが息をすることの出来たのは、二人が苗床へ着いた時だけであつた。

「僕はこの煙でよく嚏をした子供の時分のことを覚えてゐますよ、」と彼は肩を聳かしながら、「しかし今日までも、どうして煙が植物を霜から救ふのか分りません。」

「煙が、雲のない時立派な代りになるのですわ、」とタアニヤが答へた。

「しかし何の爲めに雲が要るのですか？」

「どんよりと曇つた天気ですと、朝霜が降りませんの。」

「さうですか？」とコウリンは言つた。

彼は笑つてタアニヤの手を取つた。彼女の廣い、至極まじめな、冷たい顔も、濃い、黒い眉毛も、頭を自由に動かすことの出来ぬやうなジャケツの堅いカラアも、露に濡れまいとしてたくし上げた着物も、高いすらりとした春恰好も、彼を喜ばせた。

三六

『あゝ！ ほんたうに大きくなつたものだ！』と彼は獨り言を言つた。『僕が此の前、五年前に此處に居つた時分は、あなたは全くの子供だつた。瘦せて、足が長くて、しまりがなくなつて、短い着物を着てましてね、僕がよくいぢめたものでしたよ。それが五年の間に何といふ變り方でせう！』

『さう、五年ですわねえ！』とタアニヤは嘆息した。『あの時から随分いろんな事が起りましたわ。ねえ、アンドレイ、本當の事を言つて頂戴、』と彼女は楽しさうに男の顔を見守りながら、『あなたはもう私達とは離れてし

まつたやうに思つていらつしやるの？ けれども何故私はこんな事を伺ふのでせう？ あなたは男で、お好きな生活を送つてゐなさるのだから、遠々しくなる位は當り前ですわねえ。けれども、それはさうであつてもなくつても、ねえアンドリュウシヤ、今は私達をあなたのもと思つて見て下さいますわねえ。私達はさうして頂いてもいゝでせう。』

『僕はどうからさう思つてますよ。』

『本當に？』

『本當ですとも。』

『あなたは私達があんなに澤山あなたのお寫眞を持つてゐるのをびつくりなすつたわねえ。だけでも、屹度あなたは、父がどんなにあなたを尊敬してゐるかは御存じでせう。あなたは學者で、普通の人ではない。すでに立派

三九

な履歴りれきをもお作りになつた。で父はね、あなたが成功したのは、自分が教けう育いくしたからだと堅かたく信しんじてゐるのですよ。私は父の考かんがへ違ちがひに干渉かんせふはしません。さう信しんじさせて置おかうぢやありませんか！」

もう夜明よあけだ。空そらは白しろんで、簇葉むらばと煙けむりの雲くもとは一層そうはつきりと見え初はじめた。ナイチンゲルは歌うたひ、野のの方はうからは鶉うらちの叫さけぶ聲こゑが聞きえた。

『さあ寝ねる時ときになつたわ！』とタアニヤは言いつた。『それに寒さむいことねえ。』彼女はコウリンの手てを取とつた。『有り難がたう、アンドリュウシヤ、よく來きて下くだすつたわねえ。私達わたしたちはちつとも面おも白しろくない人達ひとたちに惱なやまされてゐますの、さういふ人達ひとたちさへ澤山たくさんはありませんわ。私達わたしたちと一緒にいっしょなのは、明あけても暮くれても花園はなぞのばつかしで、外ほかには何なんにもありません。幹みきだとか、樹身きのみだとか、と彼女かのぢよは笑わらつて、『ビツピンだとか、レネットだとか(共に林檎りんごの種類しゆるいの名な)、芽かぐん

だとか、枝えだの手入ていれだとか、接木つぎだとか。……私達わたしたちの生活せいかつは全く花園はなぞののこ
とばかりで、夢ゆめにさへ林檎りんごと梨なしの外ほかは何なんにも見みやアしません。勿論もちろんかうい
ふことはみんな至極しごくいゝことで爲ためにもなりますけれど、時々ときときは私わたしだつて
變化へんくわがあればいゝと思おもはずにはゐられません。私わたしよく覺おぼえてゐますが、以い
前ぜんあなたがよく私共わたしどもへ入いらした時ときや、祭日さいじつに歸かへつていらした時ときなどは、
誰たれか家具かぐの覆おほひを取とりでもしたやうに、どんなにか家うちぢゆうが新あたららしく
晴々はれはれとなつたでせう。私わたしは其そのの時分じぶんまだほんの子供こどもでしたが、でもよく分わか
りました……』

タアニヤは暫しばらくの間話あひだした、しみじみと話はなした。その時ときふとコウリンの
頭あたまに、この夏なつの間に、この小ちひさな、弱よわ々やくやくしい、話はなし好きな人ひとを可か愛あいく思おもふや
うになるかも知れない。そして夢中ちゆうちゆうになつて戀こひに落おちるかも知れない、と

いふ考が起つた——二人の地位から言つて、これよりも有りさうなとして自然なことが何があつたか？ 其の考が彼を喜ばせ、樂しませた。で、彼は其の深切な、心配さうな顔の方に屈んだ時に、ブウシキンの對句を獨りで口吟んだ——

「オネエギンよ、私は隠しはしない

夕チヤアナに夢中になつてゐることを。」

二人が家に着いた時にはイエゴオル セミオノキツチはもう起きてゐた。コウリンは少しも眠りたいと思はなかつた。彼は老人と話を始めて、また花園へ連れ立つて來た。イエゴオル セミオノキツチは脊が高く、肩幅が廣くて肥つてゐた。彼は息切れがするのに惱んでゐたが、それでも一緒に附いて行くのは苦しいくらゐに早く歩いた。其の顔付はいつも心配さうで、

せか／＼してゐた。もし一秒でも遅れようものなら、あらゆる物が破壊されるだらうと考へてゐるやうに見えた。

『此處に一つあなたには分るまいと思ふことがある！』と彼は立ちどまつて息を續いでから言ひ出した。『地面の上には、見る通りに霜があるが、あなたのステッキからニヤアドも上に寒暖計を上げると、其處は全く暖いんだ。……これはなせかな？』

『お恥かしいが存じません、』とコウリンは笑ひながら言つた。

『いや！……あなたは何でもみんな知つてゐるといふ譯には行かない。……智慧者は何でもみんな分るといふ譯には行かないものぢや。あなたはやはり哲學をやつてゐるのかな？』

『はい……心理學を研究して居ります。一般にいふと哲學で。』

『それであなたは退屈はしないかな？』

『どうしまして、それが無ければやア私は生きてゐられません。』

『ま、結構ぢや……』とイエゴオル セミオノキツチは、考へ深さうに其の大きな頬髭を撫でながら言つた。『ま、結構ぢや……わしはあなたの爲めに非常に嬉しいのぢや、非常に嬉しい……』

と不意に彼は聞き耳を立て、恐ろしい顔をしたかと思ふと、小徑を走つて行つて、直ぐに煙の雲に包まれた木立の間に消えた。

『誰だ此の馬を此の木に繋いだのは？』と絶望したやうな聲が響き渡つた。

『泥棒野郎の人殺し野郎の何奴が此の馬を此の林檎の木に繋ぎやアがつたんだ？ あゝ、あゝ！ だいなしだ だいなしだ、めちやくちやだ、打ちこはされた！ 花園がだいなしだ、花園が打ちこはされた！ あゝ！』

彼がコウリンの所へ歸つて来た時、其の顔にはひどい目にあつて力も何も抜けたやうな表情があつた。

『一體、こんな獄道な奴等をあなたはどうすることが出来る？』と彼は兩手を絞りながら、涙聲で訊いた。『ステアカの奴が昨夜此處へ肥料馬車を曳いて来て馬を林檎の木に繋ぎやアがつた……手綱を、馬鹿が、堅く結へたものだから、木の皮が三所も摩り剥けた。こんな奴等をあなたはどうすることが出来る？ わしが話しかけると目をぱちくりしやアがつてまるで阿呆ぢや。彼奴はどうでも縛り首になる奴ぢや。』

やつと氣が落ち付いて来ると、彼はコウリンを抱いて其の頬にキスした。『ま、結構ぢや……結構ぢや……』と彼は口ごもつた。『わしはあなたが来たので非常に、非常に嬉しいのぢや。言葉に云へないほど嬉しいのぢや。』

有りがたう！』

それからまた、彼は前と同じ心配さうな顔をして、同じ早足で歩きながら、花園ちゆうをぐる／＼とまはつて、昔の被後見者に、オレンジ畑や、温室や、小屋や、現世紀の奇蹟だとして彼が説明した二つの蜜蜂の巢などを見せた。

二人が歩いてゐるうちに、太陽が昇つて、花園をあかるく照らした。暑くなつた。コウリンは長い、晴れ渡つた日が自分の前にあることを思つた時に、今はやつと五月の始めで、自分の前には、一夏の長い、晴れ渡つた、楽しい日のあることを思ひ出した。と不意に子供の頃に、此の同じ花園で遊んだ時に感じたやうな楽しい、若々しい感情が身内をめぐつて脈搏つた。で今度は、自分が老人を抱いて優しくキスした。思ひ出に心を打たれて、二

人は家の中へ這入つて古い陶器のコップから茶を飲んで、クリイムと旨いビスケットとを食べた。かういふ些細なことがまたコウリンに子供の時分や青年時代のことを想ひ起させた。華やかな現在と過去の目覺めた記憶とが入り混つて、強い幸福の感情が胸一ぱいになつた。

彼はタアニヤの起きて来るまで待つて、一緒にコオヒイを飲んでから、花園を歩きまはつて、それから自分の部屋へ行つて仕事を始めた。彼は注意して讀んで、ノオトを作つた。で唯だ窓の外や、或はテエブルの上の花瓶に生けられた、露でまだ濡れてゐる鮮かな薔薇の花やを見なければならぬやうな氣持のした時に、書物から目を擧げたばかりであつた。彼には身體ちゆうのあらゆる小さな血管が、喜びで顫へて脈搏つてゐるやうに思はれた。

併し田舎に居ても、コウリンはやはり町に住んでゐた時と同じ神経過敏な不安な生活を送つた。彼は多く読み、多く書き、イタリイ語を學んだ。そして散歩に出た時も、始終歸つて仕事をすることを考へてゐた。彼の眠る時間の少いことは、一家のものを驚かしたほどで、もしひよつとして晝間半時間でも眠らうものなら、其の晩は全く眠ることが出来なかつた。しかもかういふ眠らぬ幾夜の後でも彼は元氣で樂しかつた。

彼はよく話し、酒を飲み、高價なシガアを吸つた。殆ど毎日のやうに、若い娘達が近所の田舎家からポリソオフカへ馬車を驅つて來て、タアニヤ

と一緒にピアノを弾いたり歌つたりした。時には客が若い男のこともあつた。やはり近所のもので、巧みにワイオリンを弾いた。コウリンは熱心に彼等の音楽と歌とを聞いたが、それが爲めに疲れ果て、時とすると、獨りでに眼は閉ぢ、頭は肩の上に垂れるほどであつた。

ある日の夕方、茶の後で彼はバルコニーに坐つて讀んでゐた。客間では、タアニヤはソプラノで、友達の一人はコントラルトオで、若いワイオリニスと有名なブラガの夜樂をさらつてゐた。コウリンは其の言葉に耳を傾けたが、それはロシア語でありながら、意味は分らなかつた。で書物を下に置いて注意して聞いてからやつと分つた。亂れた想像を持つた娘が、夜、花園で或る神秘の音を聞いた、其の音が美妙だつたので、彼女は吾々人間には解せられない諸調と神聖とを認めずにはゐられなくつて、それで天へ

飛び歸つた。ユウリンの臉は垂れた。彼は立ち上つたが、疲れてゐたので、客間をあちらこちらと歩いてから、また廣間をあちらこちらと歩いた。音楽が止むと、彼はタアニヤの手を取つて一緒にバルコニーへ出た。

『一日——朝早くから、』と彼は口を切つて、『僕の頭は不思議な昔噺に囚はれてゐました。僕はそれを讀んだのか、それとも何處かで聞いたのか思ひ出すことは出来ませんが、其の昔噺は非常に珍らしくて、そして非常に辻褄が合つてゐないので。それに甚だはつきりしてゐないといふことを始めに斷つて置きます。一千年前に黒い衣を着た一人の坊さんが、荒野を——シリヤかアラビヤかの何處かをさまよつてゐたのですね……すると數マイル隔つた所で、漁師達が、別の黒い坊さんが靜かに湖の上を動いてゐるのを見たのです。この第二の坊さんは屨氣樓でした。そこであなたの心

から、あらゆる光學の法則といふやうな、勿論昔噺が認めてゐないものを取り去つて置いて、聽いて下さい。この第一の屨氣樓から別の屨氣樓が出来、第二から第三が出来て、この黒坊主の映像は永久に大氣の一つの層から他の層に反射してゐるのです。ある時にはそれがアフリカで、ある時にはスペインで、ある時にはインディアで、ある時には極北で見られました。でとうとう地球の大氣の範圍から出てしまひましたが、併しそれを消えさせるやうな状態にはつひに出會はなかつたのです。多分今日あたりは火星か或は十字星座かに見えてゐませう。そこでこの昔噺の要領は、骨子はですなえ、その坊さんが荒野へ行つてから丁度一千年目に、その屨氣樓がまたこの地球の大氣の中に影を映して、人間の世界に現はれるといふ豫言にあるのです。所で、この一千年の期限が丁度今盡きようとしてゐ

るらしい。…でその昔噺に依ると、吾々は今日か明日かに屹度その黒坊主を見るに違ひないのです。』

『不思議なお噺ですこと、』とタアニヤは言つたが、彼女にはその昔噺が面白くなかつた。

『併し最も奇態なことは、』とコウリンは笑つて、『どうしてこの昔噺が僕の頭に這入つて來たのか思ひ出すことの出來ないことです。讀んだのか？』

聞いたのか？ それとも夢にでも黒坊主を見たのか？ 思ひ出すことが出來ません。けれどもこの昔噺が僕には面白いのですよ。まる一日別のことは何にも考へやしませんでした。』

客人達の方へ歸つて行つたタアニヤと別れてから、彼は家を出て、うつとりと考へに沈みながら花床の傍を歩いた。太陽はもう沈みかけてゐた。

新らしく水を既がれた花はしつとりとした、いら／＼するやうな香を吐いた。家の中には音楽がまた始まつて、遠くの方から聞くと、ヴィオリンは人間の聲音のやうであつた。コウリンは何處でその昔噺を聞いたのかを思ひ出さうとして記憶を辿りながら、徐かに邸園を横切つて、それから、何處へ行くとも氣が附かずに、川岸の方へ歩いて行つた。

裸根の間を水際まで走つてゐる小徑を通つて、コウリンは、鵝を驚かしたり、二羽の鴨を騒がしたりしながら降りて行つた。暗い松の木には入日の光が輝いてゐたが、河の面には暗闇がもう落ちてゐた。コウリンは流れを渡つた。彼の前には今しも若いライ麥で蔽はれた廣い野が展けた。人の住家も人影も遙かに見られないで、小徑は、日は既に没した——がなほ、渺茫と果てしもなく莊嚴に、夕焼の燃えてゐる西方のまだ探檢されない謎の

國へ導いて行くもの、やうに思はれた。

「廣々としてゐるなあ——平和で自由で！」とコウリンは小徑を歩いて行きながら思つた。「まるで全世界が隠れ家から俺を眺めてゐて、俺がそれを見付けるのを待つてゐるやうだ。」

波がライ麦の上をうねつて、軽い夕暮の風が彼のむき出しの頭を柔かに吹いた。所が一分後に風がまた吹いた時には、餘程強くなつて、ライ麦はさら／＼と鳴り、後の方からは松の鈍いつぶやきが起つた。コウリンは驚いて立ち止つた。地平線の上に、旋風か龍巻のやうな、大きな黒い柱が地から天まで立つた。その輪廓ははつきりしてゐなかつたが、初めから動かすに立つてゐるのではなくつて、想像の出来ぬほどの速力でコウリンの方へ動いて來ることは分つた。そしてそれが近くなればなるほどいよいよ小

さく小さくなつた。コウリンは思はず脇へ飛び退いてその爲めに路を作つた。髪の毛の白い、眉毛の黒い、黒い衣を着た坊さんが、両手を胸の上に十字に組んだまゝで、通り過ぎた。その跣の足は地を離れてゐた。二十ヤード位もコウリンを通り過ぎてから、坊さんは彼の方を見て、頭を下げて、につこりと優しいながらにこすい笑ひ方をした。その顔は蒼ざめて瘦せてゐた。彼はコウリンの傍を通つてしまふと、また大きくなり初めて、川を飛び越え、音をも立てずに土手と松の木とに突き當つて、それを通り過ぎると、煙のやうに消えた。

「そおら」とコウリンは呟いて、「果して、昔噺は本當だつた！」

この不思議な現象を解釋して見ようとするでもなく、近くで明かに、坊さんの黒い衣ばかりか顔をも目をも見たのに満足して、氣持よさうに、

彼は家に歸つた。

邸園にも花園にも客人達は静かに歩いてゐた。家の中には音楽が續いた。して見ると彼獨りが黒坊主を見たのだ。彼は自分が見たことをタアニヤとイエゴオル。セミオノキツチとに話したいとひどく思つたが、彼等がこれを一つの幻覺と見做しはせまいかと恐れて、秘密を守ることにした。彼は聲高く笑つたり、歌つたり、マズウルカを踊つたりして、非常な上機嫌であつた。客人達とタアニヤとは彼の顔に狂喜と靈感との特殊な表情の浮んでゐるのに氣が付いた。そして彼の非常に興じてゐるのを見た。

夕飯が済んで客人達が歸つてしまふと、彼は自分の部屋へ行つてソオフアに横はつた。彼は坊さんのことを考へようと思つた。所が暫くするとタアニヤが這入つて來た。

「ねえ、アンドリュウシヤ、あなた、父の論文を御覽なされる……」と彼女と言つた。「それやア見事な論文ですよ。父は中々善く書きますの。」
 「立派だ！」とイエゴオル。セミオノキツチは娘の後から這入つて來ながら、無理に笑ひを浮べて言つた。「これの言ふことを本當にしなされるなよ！……だがもし眠りたいと思つたら讀んで御覽——それやア見事な催眠劑ぢやからね。」

「私の考へではみんな立派なものだわ、」とタアニヤは深く信じて言つた。
 「讀んで御覽なさいよ、アンドリュウシヤ、そしておとうさんにもつと度

度書くやうにツて勸めて下さいな。おとうさんにはどんな園藝論でも書けるんですもの。』

イエゴオル セミノキツチは笑つて、顔を赤くして、困つた著者がたれ隠しによく使ふやうな極り文句を呟いた。遂に彼は一步を譲つた。

『もしあなたが是非讀まうといふなら、先づかういふゴオシエエの説や、ロシアの論文を讀んで御覽、』と彼は慄へる手で論文を擇り分けながら言つた。『さうしないとあなたには分るまい。わしの反駁を讀む前に、わしが反駁しようとしてゐることを知つてなきやアならないからな。だがあなたには面白くあるまいよ……下らないんぢや。それにもう寝る時ぢやで。』

タアニヤは出て行つた。イエゴオル セミノキツチはソオファの端に坐つて、高く太息を吐いた。

「なあ、あなた……」と彼は長い沈黙の後で口を切つた。『それでなあ、あなた、わしは論文も書いたり、展覽會へも出したりして、時々賞牌も貰ふ。……で世間ぢやあ、ペソオツキイの所にはあなたの頭位も大きい林檎があるとか……ペソオツキイは花園で身代を作つたとか……一と口にいふと……』

「富み且つ榮えてゐるよコツチユベイは。」

というてゐる。けれどもわしはあなたに訊きたいのぢや、これが結局どうなつて行くんか？ この花園が見事だ、模範だといふことについては何の問題もない。……いや、早くいふと、決して花園ばかりではない、政治上重大な意義を以てゐる完全な制度としても、またロシアの農業及びロシアの工業に新紀元を劃する一段階としても……だが一體何の爲めか？ 結局

『目的は何か？』

『その問題なら容易に答へられます。』

『わしのいふのはその意味ぢやアない。わしが知りたいのは、わしが死ぬとこの花園がどうなるだらうかといふことぢや。この儘では、わしがゐなかつたら一と月だつて續きはしない。秘訣は花園が大きいつて人夫が澤山ゐるといふ事實にあるのぢやあなかつて、わしが仕事を愛するといふ事實にあるんだからぢや——いゝか？ わしは恐らくわが身を愛するよりもつと仕事を愛してゐる。まあわしを御覽！ わしは朝から晩まで働いてゐる。このわしの手で何でもする。接枝でも、枝の手入れでも、植付けでも——何もかも一切わしがやる。わしは手傳はれると嫉ましくなつたり、またぞんざいになり易いので氣が揉めたりする。で全體の秘訣は愛にあるの

ぢや、鋭い主人の目にあるのぢや、主人の手にあるのぢや、わしが友達の所へ出かけて行つて、半時間も坐つてゐると、もう心が後に残つて、わし自身ではないやうになつて——始終何か事が花園に起りはせぬかと氣が氣でなくなる其の氣持にあるのぢや。そこで、わしが明日にも死ぬとして御覽、誰がかういふことを代つてやるだらうか？ 誰が仕事をやるだらうか？ 園丁頭か？ 人夫共か？ なせかわしの今の心配の重荷は、わしの最大な敵が野兎でも甲蟲でも霜でもなくつて、他人の手であるといふことぢやよ。』

『併しタアニヤは？』とコウリンは笑ひながら言つた。『確に野兎よりも危険ではないでせう？……あの人は仕事を愛してもゐればまた理解してゐます。』

『さうぢや、タアニヤは仕事を愛してもゐればまた理解してゐる。もしわしの死んだ後で、花園が主婦としてのあれの手に渡るものなら、それならわしは何も言ひ分はない。が考へてごらん——情ないことに——あれは結婚しなければアならん！』 イエゴオル セミオノキツチは小聲で言つて、恐ろしいやうな目をしてコウリンを見た。『これが全くの難關ぢや。あれが結婚するとすれやア子供が出来ちやらう、さうなれば花園の世話を見るやうな隙はなくなるぢやらう。それだけでさへすでに悪い。所がわしが最も恐れるのは、あれの結婚するのが道樂者で、いつも金に事を缺いてゐるやうだと、花園を商人に貸すぢやらうが、すれやア何もかも最初の年にめちや／＼になつてしまふだらうといふことぢや。一體かういふ仕事には女は神の筈ぢやからなあ。』

イエゴオル セミオノキツチは太息をついて暫くの間黙つてゐた。

『恐らくあなたはそれを利己主義ぢやといふかも知れん。がわしはタアニヤの結婚するのを欲しない。わしは恐ろしいのぢや！ あんたも見たらうが、あの提琴を持つて來ては音をさせてるしやれ者を。タアニヤが決してあの男と結婚しないことは知つてゐるが、わしはあいつを見るさへ堪らななんだ。……早くいふと、わしはまあ變人ぢや……わしもそれは知つてゐる。』

イエゴオル セミオノキツチは立ち上つて、やけに部屋を行つたり來たりした。確かに何かごく大事な事を言はうとしたが、思ひ切つてそれが言ひ出せずにあつた。

『わしはあんたをあんまりまじめに愛してゐるので、打明けて話さずには

二五
 ゐられない、』と彼は両手をポケットに突き込みながら言った。『どんなデ
 リケエトな問題でも、わしは思つたまゝを言ふ方で、隠し立てをするのは
 嫌ひぢや。だから、わしは有りていに話をするが、わしがタアニヤの結婚
 するのを恐れない男はたつたあんなだけぢや。あんなは利口な男で、心掛
 けもいゝし、あんなならわしの一生の仕事が減びて行くのを見てはゐまい。
 それに一層いゝことは、わしがあんなを自分の子のやうに愛してゐて……
 あんたが自慢なことぢや。でもしあんなとタアニヤとが……一種の物語の
 結末のやうにぢやね……めでたく收まらうものなら……わしは非常に嬉
 しく非常に仕合せぢやよ。わしはあんなに面と向つて、恥かしげもなく、
 正直な人間に似合ふやうに話をするのぢや。』

コウリンは微笑した。イエゴオル セミオノキツチは戸を開いて、部屋

を去らうとしたが、ふと闕の上に立ち止つた。

『そしてもしあんなとタアニヤとに息子が出来たら、わしはそいつを園藝
 家にしよう、』と彼は言ひ添へた。『だがこんなことは下らない空想ぢや。お
 休み！』

ひとりになると、コウリンは身體の位置を工合よくして、主人の論文を取
 り上げた。第一は『中間耕作』、第二は『新花園の土壤の取扱ひについて』、
 Z氏の説を駁す、第三は『更にまた接枝について』と題されてゐた。その
 他も大抵似た範圍のものであつた。がすべてのものが不穩と病的な憤怒と
 を發散してゐた。『ロシアの林擒樹』といふ穩かな題の論文でさへ短氣を發
 散してゐた。イエゴオル セミオノキツチは、"Audi alteram partem" (『相
 言ふことも聞け』)といふ言葉で始めて、"Sapienti sat" (『賢人であれ』)でそれを
 といふ意味。

終つた。そしてこれらの博學な引用句の間には、酸性の言葉の全激流が、『大學の講座から自然を観察する官許園藝家の博學なる無學』に對して、また『其の人の名聲は俗人と好事家との讚歎の上に建てられてゐる』ゴオシエエ氏に對して、まともに流れ落ちてゐた。そしてしまひの果てに、コウリンは、果實を盗んだり樹木を傷けたりした爲めに捕はれる百姓を鞭打つのは、もはや適法ではないといふ、餘計な、全く不實な後悔の言葉に出合つた。

『あの人の仕事はい、仕事だ、身體の爲めにもなればまた心を奪はれもする、』とコウリンは考へて、『けれどもこれらの小冊子にはたゞ癩癩と血戦との外には何も無い。思ふに何處でも同じことだが、どういふ境遇においても思想の人は神経質で、この種の高尚な敏感の犠牲なんだ。思ふにそれは

さうでなければなるまい。』

彼は父親の論文を非常に喜んだタアニヤの事を思ひ、それからまたイエゴオル セミオノキツチのことを思つた。タアニヤは小さくて、蒼白くて、きやしやで、鎖骨が見えてゐて、丸く見張つた黒い伶俐な目は、いつも何物かを探し求めてゐるやうに見えた。そしてイエゴオル セミオノキツチは小刻みな急ぎ足だつた。彼はまたタアニヤの話が好きで、議論好きで、極めて意味のない言葉にさへ、いつも手眞似と身振りとを合はせることを思つた。神経質——彼女は最高度における神経質でなければならぬ。

またコウリンは讀み始めたが、何も分らなかつたので、書物を投げ出した。さつきマズルカを踊つたり音楽を聞いたりした時の愉快な心持が、いまだに彼を捉へてゐて、さまざまの考を起させた。ふと、もしもあの不

思議な、不自然な坊さんが、彼だけに見えたとすれば、彼は病氣で、精神錯亂といつてもいいやうな病氣でなければならぬといふことが頭の中で閃いた。その考は彼を脅かしたが、併し長い間ではなかつた。

彼はソオファに坐つて、手で頭をかへながら、身内に漲る何とも言はれぬ喜びを抑へてゐたが、やがてまた暫くの間部屋の中を行つたり來たりしてから、仕事にかゝつた。けれども彼が書物で讀んだ考はもはや彼を満足させなかつた。彼は何か廣大な、無限な、驚くべき事を望んだ。明け方近くなつて、彼は着物を脱いで、進まぬながらに寢床に就いた。休んだ方がよいと思つたのだ。とう／＼イエゴオル セミオノキツチが花園へ仕事に行くのを聞いた時に、彼は呼鈴を鳴らして、召使に何か酒を持つて來るやうに命じた。彼は數杯飲んだ。意識がぼんやりとなつて、眠つた。

四

イエゴオル セミオノキツチとタアニヤとはともすれば喧嘩をして、互ひに不愉快なことを言ひ合つた。この朝もまた二人は共に腹を立てた末に、タアニヤは聲を擧げて泣き出して部屋へ這入つたきり、食事にも茶にも降りて來なかつた。最初イエゴオル セミオノキツチは、彼に取つては正義と秩序とが人生の最上の興味であつたといふことを、みんなに理解させようともするやうに、まじめくさつた威嚴のある風をして歩きまはつた。けれども長くこれを續けることは出來なかつた。彼の氣は挫けた。彼は邸園をさまよひ歩いて、『あゝあ！』と太息をついた。食事の時に彼は何にも

食べなかつた。で、とうとう良心に責められて、締つた戸をそつと叩いて、おづくと呼んだ――

「タアニヤ！ タアニヤ！」

戸の内から弱い聲が、涙ぐんでゐたが併しきつぱりと答へた――

「獨りでおいて下さい！……後生ですから。」

父親と娘との衝突は、家中に、花園の人夫達にまで影響を及ぼした。コウリンはいつものやうに、自分の好きな仕事に心を取られてゐたが、とうとう彼でさへ退屈で不愉快になつて來た。彼は中へ這入つて、夕方前にその雲を拂ひ散らさうと心を極めた。彼はタアニヤの部屋の戸を叩いて、そしてはいれと言はれた。

「さあ、さあ！ 何といふ事です！」と彼は常談のやうに口を切つたが、

直ぐに彼女の涙に汚れた惱ましげな顔が、一面にぼつくと赤くなつてゐるのを見てびつくりした。「そんなにまじめなことですか、本當に？ え、え！」

「あなたは父がどんなに私をいぢめたか御存じないんです！」と彼女が言つた時に、溢れきつた涙が大きな目からばらばらとこぼれた。「父は私をいぢめました！」と彼女は両手を握りしめながら、言葉をつづけた。「私は何にも言ひやしません……たいもし……もし日傭取が得られさへすれば、要りもしない人夫を置く必要はないツて言つたわけです。……あなたも御存じの通り、あの人達は丸一週間何にもしないんですもの。私……私たいそれと言ひましたら、父は私を嘔鳴りつけて、いろんなことを……随分ひどいことを……ひどく見下げたことを申しました。それがみんな何んでもない

ことにですもの。』

『氣にかけることはないさ！』とコウリンは彼女の髪を直しながら言った。『あなただつて言ひ返したり泣いたりしたんだから、それでもういゝぢやないか。いつまでもかうしてる譯には行きませんよ……そんなことはいけませんよ……おとうさんがあなたを非常に愛してるのを知つてればなほ更らぢやありませんか。』

『父は私の一生をだいなしにしました。』とタアニヤは啜り泣いた。『私は輕蔑と侮辱とより外何にも聞いたことはありません。父は私を父の家の餘計者だと思つてゐるのです。勝手になさるがいゝ！ 父には譯があるのでせうもの！ 私に明日にも此處を出て行つて、電信技手の口でも探しますから……勝手になさるがいゝ！』

『さあ、さあ。泣くのはお止めなさいよ、タアニヤ。何の役には立ちはない。……一體あなた達は短氣で激し易いんで、どちらも悪いんだ。さあ、僕が仲裁をさせようよ！』

コウリンは優しく納得させるやうに話したが、タアニヤは本當の災難に罹りでもしたやうに、肩をびく／＼動かしたり、兩手をぐつと握りしめたりしながら泣きつゞけた。コウリンは彼女の悲みの原因が小さいので、猶更可哀相に思つた。何といふ瑣細なことがこの小さな人を一日の間、或は彼女の言葉に依れば一生の間、不仕合せにしたことぞ！ で彼はタアニヤを慰めた時に、ふとこの少女とその父親との外には、親戚として彼を愛してゐる者のこの世の中に一人もなかつたといふことを思ひ出した。でもし彼等がなかつたなら、彼は、幼年時代に早く父親をも母親をも亡くして

しまつたので、屹度一つのまことの慈愛をも感せず、即ち吾々が血縁で自分達に近い人々に向つてのみ感ずるやうな單純な、理窟も何もない愛をば一度も味はずに一生涯を送つたに違ひない。で彼は自分の疲れた、使ひ過ぎた神経が、磁石のやうに、この泣いて、身を顫はしてゐる少女の神経と感合つてゐるやうな氣がした。彼はまた自分は決して壯健な、蔷薇色な頬をした女を愛することは出来なかつたが、蒼白い、弱々しい、不幸なタアニヤは自分の氣に入つたやうに思つた。

彼は彼女の髪の毛や肩のあたりを眺めてゐると嬉しくなつたので、彼女の手をしかと握つて、そして涙を拭いてやつた。……やつと彼女は泣き止んだ。けれどもやはり父親のこと、自分の家庭における堪へられない生活のことゝをぐづく言ひ續けて、コウリンに自分の地位を解して貰はう

と力めた。そのうちにだん／＼彼女は笑を浮べたり、神がかういふ悪い性質で自分を呪つたことを歎いたり出した。そしてしまひには聲高に笑つて自分のことを馬鹿と呼んで、部屋から飛び出した。

暫くしてからコウリンは花園へ出て行つた。イエゴオル セミオノキツチとタアニヤとは、何事もなかつたやうに、並んで小徑を歩きながら、ライ麥のパンに鹽を付けて食べてゐた。二人は非常に飢ゑてゐた。

五

仲裁者としての成功を喜んで、コウリンは邸園の方へ行つた。でベンチに坐つて黙想してゐると、彼は馬車の軋る音と女の笑ひ聲とを聞いた――

また客人達らしい。影が花園にちら／＼して、ヴィオリンの響や、女の聲の音楽が殆んど聞き取れぬ位に聞えて来た。とこれが彼に黒坊主のことを思ひ起させた。何處へ、どの國へ、どの遊星へ、あの光學上の曲者は飛び去つたか？

彼が心に昔噺を思ひ浮べて、ライ麥畑の黒い幻影を想像で描き出さうとするかしないに、向うの松の樹のうしろから、音をも立てずに——極めてかすかなさら／＼といふ音をも立てずに——中背の男が歩いて来た。白髪頭には何も冠らず、黒い衣を着て、乞食のやうに跣足であつた。その青ざめた、骸骨のやうな顔には、澤山の黒い斑點が鋭く浮いて見えた。丁寧ていねいに頭をさげながら、この乞食こじきのやうな見知らぬ人は音も立てずにベンチへ歩み寄つて腰を卸した。でコウリンはそれが黒坊主であることを知つ

た。暫くの間二人は互ひに眺め合つた、コウリンは呆れ顔であつたが、坊さんはやさしいながらも、前のやうに、こすい表情を顔に浮べてゐた。『だつて君は蜃氣樓だぜ、』とコウリンは言つた。『なせ此處にゐるんだい、なせ一つの場所に坐つてゐるんだい？ それでは昔噺と違ふぢやないか。』『それは同じことぢや、』と坊さんはコウリンの方に顔を向けながらやさしく答へた。『昔噺も、蜃氣樓も、わしも——みんなあなたの興奮した想像の産物ぢや。わしは幻影ぢやよ。』

『ぢやあ君は存在してはゐないのか？』とコウリンは訊いた。

『あなたの好きなやうに考へるさ、』と坊さんは勢のない笑を浮べながら、答へた。『わしはあなたの想像の内に存在してゐるので、あなたの想像は自然の一部ぢやから、わしはまた自然の内に存在してゐなければならぬのぢ

や。」

「君は利口さうな、秀でた顔をしてゐる——僕には實際君が千年以上も生きて来た人のやうに思はれるよ、」とコウリンは言つた。「僕は僕の想像がかういふ現象を創造することが出来るとは知らなかつた。なせ君はそんな嬉しさを目付をして僕を見るんだね？ 君は僕と一緒にゐるのが嬉しいのかい？」

「さうぢや。といふ譯は、あなたが神に選ばれた人と當然呼ばれ得る僅かな人の一人だからぢや。あなたは永遠の真理に仕へる人ぢや。あなたの思想も、目的も、驚くべき學問も、あらゆるあなたの生活も、天の押印である神性の極印を持つてゐて、それはみんな合理的で美的なもの、即ち上帝に献げられてゐるのぢや。」

「永遠の真理にだ。ちやあ永遠の真理は、永遠の生活がなくつても、人間に達せられるもので、そして必要なものなんだね？」

「永遠の生活はあるのぢや、と坊さんは言つた。」

「君は人間の不滅を信するのだね。」

「勿論ぢや。あなた達人間の爲めに、大きな美しい未來が待つてゐるのぢや。そして世界にあんたのやうな人が多くなればなるほど、この未來はいよ／＼近くなつて来るのぢや。あなたのやうな、自由な意識した生活をしてゐる、最高原理の従僕がなかつたら、人道は無になるに違ひない。自然の順序で發展したのでは、人道はこの地上の歴史の終局を待たねばならぬのぢや。所があんた達が幾千年かづつ、それを永遠の真理の王國へ急がせるのぢや——そして此處にあんた達の高い務めがあるのぢや。あんたは

人間の上に置かれた神の祝福をあなた自身に體現してゐるのぢや。」

『ぢやあ永遠の生活の目的は何かい？』とコウリンは訊いた。

『すべての生活と同じく——享樂ぢやよ、本當の享樂は知識にあるので、永遠の生活は無數な、無盡藏な知識の泉を提供するのぢや。わが父の家には多くの館あり……』といはれたのは此の意味でぢや。』

『君には、君の話を聞くのが僕にどんなに嬉しいか逆も分るまい。』とコウリンは嬉しうに両手をこすりながら言つた。

『わしも嬉しいのぢや。』

『だが僕は君がゐなくなると、君の實在についての疑ひで苦しめられるだらうと思ふ。君は幻影である、幻覺である。所がこれは僕が精神病に罹つてゐること、即ち當り前の状態でないことを示してゐるのだからな。』

『さうだとした所でどうなんぢや？ 何も心配することはありやあしな

い。あんたが病氣なのはあんまり力を使ひ過したからぢや、一つの思想に健康を犠牲に供したからぢや。いや健康ばかりぢやない、やがては生命をも犠牲に供すべき時が近づいてゐるのぢや。がそれ以上の何をあんたが望むにとが出來よう？ これこそすべての天分のある氣高い人達が精進する所のものぢや。』

『併し僕がもし精神病に罹つてゐるとすれば、どうして自分を信ずることが出來ようか？』

『ぢやああなたは、世界中が信じてゐる天才といふ人達も幻影を見なかつたといふことをどうして知つてゐるのぢや？ 天才は、今世間の人の言ふ通り、狂氣に近いものぢや。本當さ、健全で當り前の者はたゞ普通の人間

ちや——凡俗ちや。神經時代とか、過勞とか、廢滅とかいふものについて
 の恐怖は、唯だ人生の目的が現在にある人々——即ち凡俗をのみまじめに
 苦しめることが出来るばかりちや。」

『ロオマ人は、「健全な精神は健全な身體に宿る」といふことを理想として
 むたぢやあないか。』

『ギリシヤ人やロオマ人の言つたことはみんな本當ぢやあない。高貴とか、
 向上とか、感激とか、法悦とか——すべてかういふやうな、詩人や、豫言
 者や、思想に殉ずる人や凡人から區別するものは、動物的生活、即ち肉
 體の健康とは兩立しないものぢや。わしは繰返して言ふが、もしあんたが
 健康でそして當り前であるのが望みなら、凡俗の仲間に入らなう。』
 『君は、僕が自分で度々考へたことを繰返してゐるが、どうも不思議だ

な！』とコウリンは言つた。『まるで僕を見張つてゐて、僕の秘密な考に耳
 を澄ましてゐたやうだ。だが僕のことには言つて呉れるな。君は一體「永遠
 の真理」といふ言葉で何を意味してゐるのかい？』

坊さんは何の答をもしなかつた。コウリンは彼を見たが、その顔は見分
 けられなかつた。其の顔付は曇つて消えてしまひ、頭と腕とは見えなくな
 り、身體はベンチと薄明との中へ萎んで行つて、遂に全く消えてしまつた。

『幻覺は去つた、とコウリンは笑ひながら言つた。『可哀さうに。』

彼は元氣よく嬉しさうに家の方へ歸つて行つた。黒坊主の言つたことは、
 彼の自愛心ばかりか、彼の靈魂、彼の全存在を喜ばした。選ばれた人であ
 ること、永遠の真理に仕へること、この世をキリストの王國たるに足らし
 めるやうに數千年づゝ早める人々の列に立つこと、人類を數千年間の争闘

や罪や苦みから救ひ出すこと、一つの思想に、青春をも、力をも、健康をも、あらゆるものを捧げること、一般の平和の爲めに死ぬこと——まあ何といふ氣高い、何といふ光榮ある理想だらう！ で彼の記憶を通して、彼の過去の生活が、純潔な、清廉な、労働に充ちた生活が流れ出した時に、彼が學んだことや、教へた事やを思ひ浮べた時に、彼は坊さんの言葉には何の誇張もなかつたと結論した。

邸園を通つて、彼を迎へに、タアニヤが來た。彼女は先つき彼が見たのとは異つた着物を着てゐた。

『此處にいらしたの？』と彼女は叫んだ。『私達はあなたを探してゐたのですよ。それは探して……。あら、まあどうなすつたの？』と彼女は彼の晴れくとした、狂喜した顔と、今しも涙の一ぱいに充ちてゐる目とを見

入りながら、驚いて訊いた。『ほんとうに變ぢやありませんか、アンドリュウシヤ！』

『僕は満足してゐるのですよ、タアニヤ、』とコウリンは手を女の肩に置きながら言つた。『満足以上ですよ、幸福ですよ！ タアニヤ、ねえタアニヤ、あなたが、僕には言葉に言へないほど可愛いんだ。タアニヤ、僕は非常に嬉しいのだよ！』

彼は女の両手に熱いキスをしてから言葉を續けた——

『僕は今極めて晴れやかな、極めて不思議な、どうしたつて此の世のこととは思はれないやうな時を過したのです……。けれどもあなたにすつかり話すことは出来ません、あなたは屹度僕を氣違ひだといふか、さもなければ僕の言ふことを信じないに極つてゐるから……。僕にあなたのことを話

三美
 させて下さい！ ねえタアニヤ、僕はあなたを愛してゐる、もう久しい前から愛してゐた。あなたを傍におくことが、日に十遍もあなたに逢ふことが、僕に取つて必要なことになつたのです。僕はあなたがゐなかつたら、内へ行つてからどうして暮らせるか、分りません。』

『いゝえ！』とタアニヤは笑つた。『あなたは二日もすれば私達のこととはみんなお忘れになりますわ。私達はつまらない人間ですし、あなたはえらい方ですもの。』

『まじめに話さうぢやありませんか』と彼は言つた。『僕はあなたと一緒に連れて行かうと思つてゐるのですよ、タアニヤ！ いゝでせう？ 行くでせう？ 僕のなんになるでせう？』

タアニヤは『まあ？』と叫んで、そしてまた笑はうとした。が笑は來な

いで 代りに、赤い斑點が頬の上にはつと出た。彼女は息をはずませながら、急いで邸園の方へ歩いて行つた。

『思ひもしなかつた……全くこんなことは思ひもしなかつた……全く思ひもしなかつた、と彼女は絶望でもしたやうに両手を一緒に握り締めながら言つた。』

所がコウリンは後から急いで行つて、同じ晴れ々とした、狂喜した顔のまゝで、話しつゝけた。

『僕は僕を全く捉へてしまふやうな愛を求めます。そしてさういふ愛は、ねえタアニヤ、唯だあなただけが僕に與へることが出来るのです。僕は幸福です！ どんなに幸福だか！』

彼女はさんぐに壓倒されて、萎れてしまつて、急に十年も歳を取つた

やうに見えた。がコウリンは彼女の美を見付けて、聲高にその狂喜を表白した――

二五

「何てまあ可愛い女だらう！」

六

物語がめでたく終つたばかりか、結婚が続いて来るやうになつたといふことをコウリンから聞いた時に、イエゴオル セミオノキツチは隅から隅へ歩いて、心の激動を隠さうとした。手は顔へ、顔は膨れて紫色に見えた。彼は競争馬車に馬を着けさせて、驅つて行つた。タアニヤは、いかに彼が馬を鞭打つたか、いかに彼がシャツポを耳の上に押し下げたかを見ると、

その心持が解つたので、自分の部屋の中に閉ぢこもつて、終日泣いた。

橙園には桃と梅とがすでに熟してゐた。かういふ損じ易い荷を荷造りしてモスコウへ發送するには、多くの注意と面倒と騒ぎとを要した。夏の暑さの爲めに、あらゆる木は水を漑がねばならなかつたが、その仕事にも時間と努力とは随分と費された。また澤山の毛蟲が付いたのを、人夫は勿論、イエゴオル セミオノキツチやタアニヤまでも、指で押し潰したが、これはひどくコウリンを厭やがらせた。果實や樹木に對する秋の用意にも取りかゝらねばならなかつた上に、大きな取引は續いて行はれた。そしてこの最も忙しい、何人もちよつとの暇さへ持つてゐないやうな時に當つて、仕事は野にも始まつたので、花園からは人夫の半ばを取られてしまつた。イエゴオル セミオノキツチはすつかり日に焼けて、氣をいら／＼させな

二五

がら、心配しきつて、今は花園へ、今は野へと馬を跑けらせた。そしてみんなが自分をすたくくに引き裂かうとしてゐるとか、自分で弾丸を頭脳に打ち込まうと思ふとか、と絶えず嘸鳴つた。

かういふ事の眞最中に、ペソオツキ家が無限の意味を持たしてゐるタアニヤの嫁入支度の騒ぎが来た。いつまでもちよきくいつてる剃刀の音や、裁縫機械のがらぐらい音や、火熨斗の匂ひや、神経質で怒りッぽい裁縫師の氣むづかしさなどで、家中はひつくり返りさうに見えた。そこへ、客の毎日來るのが一層始末を悪くした。これらの客は楽しませたり、食べさせたりした上に、夜は泊めなければならなかつた。けれども仕事も氣苦勞も喜びの霧で氣付かずに過ぎた。タアニヤは、十四の時からこつち、コウリンが自分以外のものと結婚しないといふことは確かめられてゐたにも

かゝはらず、まるで愛と幸福とが不意に自分の身の上而降つて來でもしたやうに思つた。彼女はいつまでも驚きと、疑ひと、自分の身が信せられなといふ状態にあつた。ある時は雲の上へ飛んで行つて、神に祈らなければならぬと思つたほどの非常な喜びに捉はれたが、少し経つとまた、今に八月が來れば、自分の子供時代からの家を去つて、又親をも捨て、行かねばならぬといふことを想ひ出した。彼女はまた自分はいふにも足らぬ、詰らぬもので、コウリンのやうな大人物と一緒にいる値打はないといふ考で——それが何處から來るとも知らぬが——脅かされた。かういふ考が起つて來ると、彼女はいつも自分の部屋へ驅け込んで、獨りで閉ぢこもつて、長い間悲しげに泣いてゐた。けれども客の前では、コウリンが際立つて綺麗な男であつたことや、すべての女が彼を愛して彼女を妬んだことなどが

不意に感じられたので、さういふ時には彼女の胸は全世界を征服してもしたやうな狂喜と誇りに充ちてゐた。彼が誰か別の女に笑ひかけでもした時は、彼女は妬まじさに身を震はして、自分の部屋へ行つて、また——涙に暮れた、かういふ新しい感情が全く彼女を捉へてしまつた。彼女は機械的に父親を助けたばかりで、梨にも、毛蟲にも、人夫達にも、どんなに早く時が過ぎつゝあつたかといふことにも氣付かなかつた。

イエゴオル セミオノキツチもまたほゞ同じやうな心の状態にあつた。彼はやはり朝から晩まで働いて、花園を飛びまはつて、痲癩をも起したが、始終魔術の幻想に包まれてゐた。その巖疊な身體の中では二人の人が争つてゐた。一人は本當のイエゴオル セミオノキツチで、園丁のイワン カアルロキツチから何かの過失か不取締の報告を受けると、かつと氣違ひの

やうに髪の毛をかきむしつたが、もう一人は嘘のイエゴオル セミオノキツチで——半醉の老人で、その人は言葉の半ばで大事な會話を止めて、園丁の肩を掴んでそして言ひ出した——

『貴様は何とでも好きなやうに言ふが、血は水よりも濃いものぢや。あれの母親は、それやア驚くやうな、非常に氣高い、非常に立派な女だつた。その女の善良な、純潔な、隠し立てをしない、天使のやうな顔を見るのは楽しみだつたぞ。見事に書も書けば、詩も作れば、外國語を五つも話したり、また歌つたりした。……可哀さうに、とう／＼肺病で死んでしまつたの、やがなあ！』

嘘のイエゴオル セミオノキツチは太息をついて、ちよつと黙つた後で言葉を吐けた——

「あれがまだ子供で、おれの家に大人になるまで居つた時分は、やはりさういふやうな、隠し立てをしない、善良な、天使のやうな顔をしてゐた。目付も、動作も、言葉も、母親のやうにやさしくて品があつたワ。そして其の智慧ちや！あれが博士の學位を持つてゐるのは不思議ぢやあない。だが貴様まあ待つて居れよ、イワン カアルロキツチ、十年間のうちにあれが何になるかまあ見ろ。それやア、すばらしいものになるぢやらうぞ！」

所が此處で本當のイエゴオル セミオノキツチが我に返つて、頭を掴んで嘔鳴り出した――

「畜生め！霜焼め！だいなしだ、打ちこはされた！花園がだいなしだ、花園が打ちこはされた！」

コウリンは全く以前のやうな熱心で仕事をしてゐて、周囲の騒ぎは殆んど

ど氣にも留めなかつた。たゞ愛のみが焔の上に油をそゝいだ。いつもタアニヤと逢つた後では、大喜びで樂しさうに部屋へ歸つて、始めて彼女とキスして愛を誓つた時と同じ熱情で書物と原稿とに向つて仕事を始めた。彼が神に選ばれた人であることや、永遠の眞理や、光榮ある人類の將來などについて、黒坊主の彼に語つたことが、すべての彼の仕事に獨得な異つた意義を與へた。毎週一二度、彼は邸園か家の中かで坊さんに逢つて、長い間話をしたが、これはもはや彼を恐れさせずに、却つて反對に喜ばした。それはかういふ幻影は、思想の使命に身を捧げるやうに選ばれた特別の人だけを見舞ふものだといふことが確かめられたからである。

聖母昇天祭は知らぬ間に過ぎた。やがて結婚の時が来て、式はイエゴオル セミオノキツチの是非にといふ望みに依つて、エエクラアと呼ばれて

ゐた事で、即ち、二日の間引き續いた意味もないお祭騒ぎで祝された。三千年ルウブルは飲食の用に費された。けれども、下品な音楽や、騒々しい祝杯や、下らなく騒ぐ召使達や、喧騒や、締め切つた空気をどうしようもなかつたので、特にモスコウから取り寄せた高價な酒や、驚くやうな添物などは何人にも正しく味はれなかつた。

七

長い冬の夜の一夜。コウリンは寢床の中でフランスの小説を讀んでゐた。哀れなタアニヤは、都に慣れない生活の爲めに毎晩頭痛を悩んでゐたが、もう長い間、夢の中で聯絡のないことをつぶやきながら眠つてゐた。

時計は三時を打つた。コウリンは蠟燭を消して横になつて、長い間目を閉ぢて横になつてゐたが、部屋の熱いのとタアニヤの間斷なくつぶやいてゐるのとで眠ることが出来なかつた。四時半に彼はまた蠟燭を點けた。黒坊主が寢床の傍の椅子に坐つてゐた。

「今晚は！」と坊さんは言つて、それからちよいと黙つた後で、訊いた

「何をあんたは今考へてゐるのぢや？」

「名譽といふことさ」とコウリンは答へた。「僕が今讀んでゐたフランスの小説では、主人公は馬鹿げたことをする青年で、名譽を得ようとする熱情から死ぬんだがね。僕にはこの熱情が分らないんだ。」

「何故かといふとあんたは利口すぎるからぢや。あんたは名譽といふものを、あんたを面白がらすことの出来ないおもちやとして冷淡に見てゐるの

ちや。」

『それやア本當だ。』

『名譽はあんたに對して何の引力をも持つてゐないのちや。一體人間は、時が晚かれ早かれ碑文を塗り消すと知つてゐたら、自分の名が紀念碑に刻まれるといふことを知つた所で、何で追従や、喜びや、教訓やを得ることが出来よう？ さうちや、幸ひなことに、あんた方の名をみんな記憶するにしては、短い人間の記憶に對してあんた方の數が多すぎるのちや。』

『勿論だ。』とコウリンは言つた。『がまたなせみんなを記憶するのか？……だがまあ別なことを話さうぢやないか。例へば、幸福といふことを。一體この幸福とは何だ？』

時計が五時を打つた時に、彼は寢臺に腰を掛けて、足を絨氈の上におら

しくと引きすりながら頭を坊さんの方へ向けて、そしてかう言つてゐた――

『昔ある男は自分の幸福が非常に大きかつたのが怖ろしくなつて、神々の心を和げる爲めに、自分の大事な指環を神々の前に捧げたといふことだ。君も聞いた？ 僕も今、ポライクレエトスのやうに、自分自身の幸福を少し恐れてゐるのだ。朝から晩まで僕はたい喜びのみを経験してゐる――喜びが僕を吸ひ込んですべての他の感情を抑へつけてゐる。僕は悲みとか、苦みとか、疲れとかいふ意味を知らないんだ。僕はまじめにいふが、疑ひ始めてゐるんだ』

『何故ちや？』と坊さんは驚いたやうな調子で訊いた。『ちやアあんたは、喜びは超自然の感情だと思つてゐるのか？ 當り前の状態ではないと思つて』

ゐるのか？ さうぢやない！ 人間は精神的及び道德的發展の途に上れば
 上るほどいよ／＼自由になり、いよいよ大いなる満足を生活動から受けるも
 のぢや。ソクラテスも、ダイオジエネスも、マアカス オオレリアスも喜
 びを知つて悲みを知らなかつた。また使徒は言つた、「喜びを盡せ」と。喜
 んでそして幸福であるがいゝ！」

『すれば突然神々が怒るだらう、』とコウリンはおどけて言つた。『だが若し
 神々が僕の幸福を盗んで僕を身震ひさせて餓死せしめるやうなことがある
 とすれば、僕の趣味には逆も合ひはしないからね。』

タアニヤは目が覺めて、夫を見ると驚き恐れた。彼はしやべり乍ら椅子
 に向つて、身振りをしたり、笑つたりした。その目は輝いて笑ひ聲は異様
 に響いた。

『アンドリュウシヤ、あなたは誰に話してゐるの？』と彼女は、彼が坊さ
 んの方へ伸ばした手を掴みながら訊いた。『アンドリュウシヤ、誰がゐるの
 です？』

『誰が？』とコウリンは答へた。『なせ、坊さんだよ！…其處に坐つてゐ
 るぢやないか。』彼は黒坊主に指さした。

『其處には誰もゐませんよ、…だあれも、アンドリュウシヤ。あなたは
 御病氣ですよ。』

タアニヤは夫を抱いて、そして 幻影に對して防禦しようとするや
 うにしかと身體を押しつけながら、手で彼の兩方の目を蔽うた。

『あなたは御病氣ですよ、』と彼女は總身を顛はせながら啜り泣いた。『御免
 なさいね、あなた、私は長い間あなたがどうも神經衰弱に罹つてゐるやう

に思つてゐました。……あなたは御病氣ですよ。……精神の方の、アレドリユウシヤ。』

身震ひがぞつと彼の身體中に傳はつた。彼はもう一度、今は空虚の椅子を見た。と不意に腕と脚とが弱つたやうに思つた。彼は着物を着始めた。

『なあに、何でもないよ、タアニヤ、何でもないよ……』と彼は口籠りながらやはり身震ひした。『だが僕は少し工合が悪い。……やつと今分つたよ。』

『私は長い間氣が付いてゐました。父も氣が付いてゐました。』と彼女は啜り泣きを止めようとしながら言つた。『あなたはひとりでをかした事を仰つて、變にお笑ひなすつてゐました。……それにお眠りなさらぬし。お神様、どうぞお助けなすつて下さい！』と彼女は恐ろしさうに叫んだ。

『だけでも恐れることはありませんよ、アンドリュウシヤ、恐れてはいけません。……本當に恐れることはありませんよ……』
彼女もまた着物を着た。……でコウリンは彼女を見た時、やつと自分の位置の危険なことが解つて、黒坊主と二人の會話との意味も解つた。で自分の氣が違つてゐたことも明らかになつた。

二人は、なせかは自分達でも知らずに、着物を着て、女が先に、男はその後について、廣間の方へ出て行つた。其處で、二人は寢巻姿のイエゴオルセミオノキツチを見た。彼は二人と一緒に滞在してゐたので、タアニヤの啜り泣きで目を覺まされたのであつた。

『恐れることはありませんよ、アンドリュウシヤ、』とタアニヤは熱病に罹りでもしたやうに顫へながら言つた。『恐れることはありませんよ……おと

うさん、これは直ぐに癒りますわ、……直ぐに癒りますわ。』
 コウリンは殆ど口を利くことも出来ないほどに心が亂れてゐた。が彼は
 その事を常談にしてしまはうとした。彼は舅の方へ向いてかう言はうと思
 つた――

『祝して下さい。私は少し氣が變になつたやうです。』けれども彼の唇
 はたゞ動いただけだつたので、彼は苦笑した。

九時になると、彼等は外套と毛皮のマントとを着せて、シヨウルで包ん
 で、彼を醫者の家へ馬車で送つた。彼は始めて治療を受けた。

八

またの夏。醫者の命令でコウリンは田舎へ歸つた。彼は健康に復したの
 で、もはや黒坊主を見なかつた。たゞ残つてゐるのは體力を恢復すること
 だけであつた。彼は舅と一緒に住んで、澤山の牛乳を飲み、一日にたゞ二
 時間だけ仕事をして、酒には手も觸れず、煙草も全く吸はなかつた。

六月十九日の夕方、エリチャア祭の前夜、晩拜式がその家で行はれた。
 坊さんが寺男から香爐を取つて、大廣間が教會のやうに匂ひ始めると、コ
 ウリンは退屈を感じた。彼は花園へ出て行つた。自分のまはりに咲き亂れ
 た綺麗な花には氣も留めずに行つたり來たりしてゐたが、ちよつとベン
 チに坐つてから、今度は邸園を向うへ歩いて行つた。彼は川の縁までだら
 だら下りになつてゐる土手を降つて、ちつと立つて、訝しさに水の方を
 見た。一年前に若々しい、楽しさうな、元氣な彼を見た。犬のやうな根を

持つた大きな松の樹は、今はもう叫きもせず、彼を認めもしないものゝやうに、黙つてちつと動かずに立つてゐた。……また實際の話が、短く刈つた髪の毛と、弱々しい歩き方と、陰気な蒼ざめた去年以來全く變つた顔付とでは、何處でも恐らく認められようがなかつたに違ひない。

彼は流れを渡つた。去年ライ麥で蔽はれてゐた野には、熟した燕麥の畦があつた。太陽は没して地平線には廣い、赤い夕焼が、荒れ模様を豫示するやうに燃えてゐた。すべては静かであつた。で、コウリンは一年前に始めて黒坊主を見た地點の方をちつと見てから、深紅色の褪せて行くのを見守りながら二十分間も立つてゐた。彼が疲れて物足らなく思ひながら家に歸つた時に、イエゴオル・セミオノキツチとタアニヤとは露臺の階段に坐つて茶を飲んでゐた。二人は話してゐたが、コウリンを見ると、止めた。

けれどもコウリンは二人の顔付で今まで自分のことを話してゐたのを知つた。

「牛乳を召上る時分ですよ、」とタアニヤは夫に言つた。

「いや、まだいらぬ、」と彼は一番下の階段に腰を卸しながら答へた。「お前おあがり。僕は欲しくない。」

タアニヤはこはく父と目を見交しながら、罪を犯した人のやうな聲で言つた――

「よく御存じぢやありませんか、牛乳があなたに善いッてことは。」

「うむ、幾らかい、」とコウリンは笑つた。「お祝ひ申すがね、僕は先の金曜日から目方が一ぼんど殖えたよ。」彼は両手で頭をじつと抑へながら苦しさうな聲で言つた――「なせ……なせお前は僕を癒したのか？ 臭刺だ、

懶けてゐるだ、風呂だと、一口食ふのも、一足歩くのも、譯もなく恐ろしさうに見張つてゐてさ……かういふことはみんな、結局は僕を馬鹿にしてしまふだらう。なるほど僕は氣が違つてゐた……誇大狂だつた。……けれども、それにも拘らず僕は快活で、元氣で、また幸福でもあつた。……興味があつて獨創的だつた。所が今は全く世間の人と同じやうに、合理的な確實な者になつた。僕は平凡な人間で、生きてゐるのは退屈だ。……あゝ、どうして残酷にも……どうして残酷にもお前は僕を癒したんだ！ 僕は幻想を見た……けれどもそれがどういふ害を誰に與へたか？ お前に訊くがどういふ害だ？

他愛もないことばかり言つてゐる！——とイエゴオル セミオノキツチは嘆息した『お前のいふことは聞いてゐるのも馬鹿々々しい。』

『ぢやアお聞きなさらぬがい。』

他の者のゐることが、殊にイエゴオル セミオノキツチのゐることが、この際コウリンを激させた。彼は素氣なく、冷かに、且つ無作法に鼻に答へた上に、輕蔑と憎惡となしには彼を見ることが出来なかつた。するとイエゴオル セミオノキツチは困つたやうな氣持がして、どうして自分が誤つてゐたかは解らなかつたけれども、悪かつたといふやうな咳をした。二人の従來の親しかつた間柄がかうも俄かに變つた譯が分らなくつて、タアニヤは父親に凭りかゝりながら、驚いたやうにその目を見入つた。二人の間柄が日増にだんだん悪くなることや、父親が非常に年寄つたことや、夫が怒りッぱく、氣が變り易く、興奮し易く、そして興味を持たなくなつたことは彼女にも分りかけてゐた。彼女はもはや笑ひも歌ひもせなければ、

何も食へもせず、終夜眠りもしないで、午飯時から晩方までは無感覚で寝てゐるほどに身を苦しめながら、何か差し迫つてゐる恐怖の下に生きてゐた。晩拜式の行はれてゐた時に、彼女には父親が泣いてゐたやうに見えたので、今露臺に坐つてからもそれについては考へないやうに力めてゐた。

『佛陀やマホメットやシエクスピアは、深切な親戚や醫者が、彼等の法悦や靈感を癒さなかつたのでどんなにか幸福だつた！』とコウリンは言つた。『もしマホメットが、神經の爲めに臭剣を呑んで一日にたゞ二時間だけ仕事をして、そして牛乳を飲んだなら、あの驚くべき人も、後には犬が残した位のものしか残さなかつたに違ひない。醫者や深切な親戚はたゞ人道を愚にしようとして最善を盡してゐるのだ。で、いつかは凡人が天才と考へられて、人道の滅ぶ時が来るだらう。もしお前がどんな思想でも持

つてさへゐて呉れたなら、』とコウリンはすねるやうに結論した『もしお前がどんな思想でも持つてさへゐて呉れたなら、僕はどんなにかありがたかつたらう！』

彼は強い憤怒を感じたので、この上言ふことを自分で妨げようとして、起つて家の中へ這入つた。風のない晩で、窓の中には煙草の葉とヤアラツバとの匂ひがしてゐた。大きな暗い廣間の窓から、床の上にもビヤノの上にも月光が落ちてゐた。コウリンは去年の夏の狂喜を想ひ出した。その時も、空気が今のやうにヤアラツバの匂ひで充ちて、月光は窓から射し込んでゐた。……彼は去年の氣分を喚び起さうとして、自分の部屋へ行つて、強いシガアに火を點けた。そして召使に酒を持つて來るやうに命じた。處が今はシガアは苦くてまづく、酒は去年の味ひを失つた。止めてゐるとい

ふのはひどいものだ！一吸ひのシガアと二た吸りの酒とで頭がぐらくして、彼は臭刺を呑まねばならなかつた。

寢床へ行く前にタアニヤは彼に言つた――

『もし。父はあなたを崇拜してゐるのですよ。それなのに、あなたは何かにつけて父に邪慳にお當りなさる、それがどんなにか父の壽命を縮めてゐますわ。御覽なさいよ、あのお顔を。父は日毎にどころか、時間毎に年をお取りなさるぢやありませんか！ねえあなた、アンドリュウシヤ、どうぞお願ひですから、あなたの亡くなつたおとうさんの爲めに、私の心の平和の爲めに――父をまた深切にしてやつて下さいね！』

『僕には出来ない、またしようとも思はない。』
『だつてなぜです？』タアニヤは總身をぶるぐくと震はした。その譯を仰

有つて下さい！』

『なせつて僕はあの人を好かないからさ、それつきりだよ、』とコウリンは肩を聳かしながら、無造作に答へた『併しそんなことは話さん方がいゝんだ、あの人はお前のおとうさんだものな。』

『私には、私には解りません、』とタアニヤは言つた。彼女は兩手で額をじつと抑へながら、目を一點に据ゑた。『何か恐ろしいことが、何か譯の分らない事が、この家に這入つて來たんです。アンドリュウシヤ、あなたはお變りなすつて、もうあなたではありません。……あなたは――利己な、人並すぐれた方だつたのに――つまりらぬことに腹をお立てなさるやうになつた。……あなたは別の時なら御自分でも信じなさるまいと思ふやうな些細な事で苦しんでいらつしやる。いゝえ……怒つてはいけません、怒つては

「いけません、」と彼女は自分の言葉で怖くなつて、彼の手にキスしてから言葉をついた。『あなたは利口な、やさしい、氣高い方です。あなたは父を深切にして下さるでせう。あの人はあんなに善い人ですもの。』

『善い人ではない、たゞ機嫌がい、だけなんだ。あゝいふよく肥つた、のんきな顔をしてゐる——お前のおとうさんのやうな型の——流行唄の伯父さん達はな、その道での役者なんだ。一度は小説でも、喜劇でも、或は實生活でも僕を喜ばしたものだつた。けれども今ぢや僕にはいやな奴なんだ。あいつらは骨の髄までも利己主義で固まつてゐる。……何がやだといつて、あいつらの食ひ飽きた顔位いやなものはない。あの、まるで牛のやうな——でなければ豚のやうな——胃の腑の樂天主教位。』

タアニヤは寢床に坐つて、頭を枕に伏せた。

『あゝ苦しい！』と彼女は言つた。その聲から彼女が全く疲れ果て、物を言ふさへやつとであつたことが分つた。『去年の冬からといふもの、一刻も心の休まつたことがない。……ほんたうに恐ろしいことだ！ 私はもう苦しくつて……』

『さうとも、當り前だ！ 僕はヘロドで、お前とお前の親爺さんは虐殺される幼児なんだ。當り前だ！』

彼の顔がタアニヤには醜く厭はしく見えた。憎悪と輕蔑との表情はそれに似合はなかつた。彼女でさへ何か彼の顔に缺けてゐたことに氣が付いた。髪の毛が刈られてからはいつも變つて見えてゐた。彼女は何か侮辱するやうなことを言ひたくてたまらなかつたが、やつと自分で抑へて、恐怖の念に驅られながら、寢室から出て行つた。

九

コウリンは獨立講座を受取つた。彼の就任演説は十二月二日と定められて、その意味の告示が大學の廊下に掲示された。所が其の日が来た時、大學の當事者は、彼が病氣の爲めに約束を履行することが出来なくなつたといふ電報を受取つた。

血が彼の咽から来た。彼はそれを吐いた。と、ひと月に二度流れるやうに溢れ出した。彼は恐ろしく弱つて、夢現の境に落ちた。けれどもこの病氣は彼を驚かさなかつた。死んだ母親が同じ病氣で十年以上も生きてゐたことを知つてゐたからである。醫者もまた危険のないことを保證して、た

だ氣を揉まずに、規則的な生活を送つて、なるべくしやべらないやうにと忠告しただけであつた。

一月も講義は同じ理由で延ばされた。そして二月になつては課程を始めるのに遅過ぎだ。で次ぎの年まで延ばされた。

彼はもうタアニヤとは一緒にゐずに、自分よりも年上の別の女と住んでゐた。その女は彼をばまるで子供でもあるやうに世話してゐた。彼の氣分は穏かで従順であつた。彼は甘んじて服従した。でワアルワラ ニコラ イエフナー——といふのが女の名であつた——が彼をクリミヤへ連れて行かうと支度をした時に、彼は轉地したとて何の効能もあるまいとは思つたが、行くことに同意した。

彼等はある日の夕方遅くセバストポオルに着いたので、翌日ヤルタへ

馬車で行くことにして、其處へ泊つた。二人は旅で疲れてゐた。ワアルワ
 ラ ニコライエフナは茶を飲んで寢床へ行つた。けれどもコウリンは残つ
 てゐた。停車場へ行かうとして家を出掛ける一時間前に、彼はタアニヤから
 一通の手紙を受取つたが、まだ讀まなんだ。で此の手紙のことを考へると
 心は不愉快に擾れた。胸の底では彼はタアニヤとの結婚が過ちであつたこ
 とを知つてゐた。彼はとう／＼彼女から離れたことを喜んでゐたが、この
 女が、しまひには大きな伶俐な目の外はみんな死んでしまつて、生きなが
 らの木乃伊となつて歩いてゐるやうに見えたことを想ひ出すと、自分に對
 する憤怒と憐愍との念のみが起つた。封筒の筆蹟が、彼に二年前、自分が
 残酷な無理な事をしたことや、全く罪もない人々に、自分の精神上の空虚
 や、孤獨や、生活に對する幻滅やの仇を報いたことを想ひ起させた。……

彼はまた、かつて自分が病氣になつてから後に書いた講義とすべての論文
 とをすた／＼に破つて、窓から投げ捨てたことや、その斷片が風に翻つて
 木や花の上に留つたことなどを思ひ出した。あらゆるペエジに彼は變な根
 據のない主張と、愚にもつかぬ憤怒と、誇大狂とを見たのであつた。でか
 ういふことがみんな、彼に、彼自身の過失の記録を書いたのだといふ印象
 を與へた。けれども最後の筆記帳が破られて窓から投げ捨てられると、彼
 は悲痛と憤怒とを覺えたので、妻の所へ行つて残酷にも彼女に話した。あ
 う、どんなに彼が彼女の生活を滅したとか！ 彼はまたかつて、彼女を
 苦しませようとして、彼女の父親が自分達の物語の中で一通りならぬ役を
 演じたことや、彼女と結婚するやうに頼んだといふことまでも話したのを
 思ひ出した。その時イエゴオル セミオノキツチが偶然それを漏れ聞いて、

いきなり部屋の中へ飛び込んだが、喫驚して一語も發し得ないほどに口が利けなかつたので、たゞ一點に突つ立つてまるで舌は切り取られでもしたやうな變な叫びを擧げた。するとタアニヤは父親を見て、斷腸の聲を擧げて泣き出すと、氣絶して床の上に倒れた。それは恐ろしかった。

かういふ一切の記憶がよく知つてゐる手跡を見ると彼に歸つて來た。彼はバルコニーへ出て行つた。暖かな静かな晩で、潮の香が海の方から來た。月光と周囲の燈火とが、驚くべき灣の面に——名くることの出來ない色彩の面に映つてゐた。それは暗い藍色と綠色とが優しく柔らかに混り合つたもので、ある部分は、水が綠礫のやうに見え、またある部分は、水の代りに、流動する月光が灣に充ちてゐた。そしてこれらのものはみんな色の調和を保つて、静寂と發揚とを吐いてゐた。

バルコニーの下に當る、此の宿屋の下階では、窓を開け放してあると見えて、女達の聲や笑ひ聲がはつきりと聞えて來た。其處には屹度宴會があるに違ひない。

コウリンは我れとわが心を勵まして、手紙の封を切ると、部屋へ歸つて讀み初めた——

「父は只今死にました。それについて、私はあなたにお禮を申し上げます。父を殺したのはあなただからです。私達の花園は荒れるに任せてあります。そして他人の手で管理されてあります。哀れな父があんなにも恐れてゐたことが起つて來たのでございます。これについてもまた私はあなたにお禮を申し上げます。私は心からあなたを憎み、あなたが直ぐにも死ねばよいと願つてゐます！ あゝ、どんなにか私は苦しい！ 私の胸は張りさけるやう

な苦痛で燃えてゐる！……あなたが呪はれ、ばい、！ 私はあるあなたを人並
すぐれた人だと思ひ、天才だと思つて、あなたを愛した。所があなたは狂
人だつた。……」

コウリンはこの上讀むことは出来なかつた。彼は手紙を裂いて其の斷片
を投げ捨てた。……彼は不安に——殆ど恐怖に驅られた。……衝立の向う
にはワアルワラ ニコライエフナが眠つてゐて、彼は其の呼吸を聞くこと
が出来た。下階からは女達の聲と笑ひ聲とが聞えたが、彼はこのホテル中
に、生きてゐるものは自分の外に一人もゐなかつたやうな氣がした。哀れ
な取り亂したタアニヤが手紙の中で彼を呪つて、彼の病氣になることを願
つた事が、彼を苦しませた。で彼は二年このかた、自分自身の生活と自分
に最も親密であつた人々の生活とに、かくまでの破滅を持ち來した不可知の

力をまた見ることを恐れでもするやうに、恐ろしさうにドアの方を見た。
神經が亂れた時の最も善い避難所は、仕事をあるといふことを、
彼は經驗で知つた。でいつもテエブルに向つて、ある極つた思想に心を集
中することにしてゐた。彼は赤い紙挾から、小さな編纂の仕事の目録見書
のある筆記帳を取つた。それは、クリミヤに滞在してゐる間、もし何もせ
ぬのが退屈になつたら仕ようと思つてゐたものであつた。……彼はテエブ
ルに向つて、此の目録見書に手を付けた。するとだん／＼以前の穩かな、
諦めたやうな、世間離れをした氣分を回復して來るやうに見えた。この目
録見書が世間の虚榮に關する思索に彼を導いた。彼は生活が、人間に與へる
極めて普通な平凡な利益に對して要求する報酬の大なることを考へた。四
十年前に哲學の講座を得ようとして、普通の教授にならうとして、平凡な思想

を——しかもそれらの思想は他人の思想であるのに——弱い、退屈な、鈍い言葉で説明しようとして、一口に言へば、博學な凡人の地位を得ようとして、彼は十五年間勉強し、晝も夜も働いて、ひどい精神病にも罹れば、失敗した結婚にも生き残つて——想ひ出すのは苦痛なやうな愚劣な不正な過ちを澤山重ねて来た。所が今は自分の凡人であつたことが明かに分つたので、甘んじてそれに従つた。人はみな自分の値打相當で満足しなければならぬといふことを彼は知つてゐたからである。

目論見書が彼の心を鎮めたが、裂かれた手紙が床の上に落ちてゐて思想の集中を妨げた。彼は起つて、紙片を拾ひ上げて、それを窓から投げ捨てた。所が軽い風が海から吹いて来て、紙片は窓臺の上にひら／＼と舞ひ戻つた。彼はまた恐怖に近い不安に捉はれて、ホテル中に、自分の外には一

人も生きてゐるものがなかつたやうに思つた。……彼はバルコニーへ出て行つた。灣はまるで生きてでもゐるやうに、その澤山な明るい暗い藍色の目から、トルコ玉と火との目からちつと彼を見て、手招いた。暖い息のつまりさうな晩だつたので、彼は浴びたらどんなにか氣持がよからうと思つた！

不意にバルコニーの下でワイオリンが弾き出されて、二人の女の聲が歌つた。それがみんな彼に解つた。彼等の歌つた歌は、亂れた想像を持つた若い娘が、夜、花園で神祕な響を聞いて、其の中に、吾々人間には解せられない諧調と神聖とを認めたといふことを語つた。……コウリンは息を凝らした、と彼の心臓は鼓動を止めて、長く忘れてゐた不思議な狂喜の念がまた胸の中で顫へた。

高い、黒い柱が、旋風か龍巻かのやうに、向う岸に現はれた。それが灣を横切つてホテルの方へ、信せられないほどの速力でやつて來た。やがてだん／＼小さく小さくなつたので、コウリンは脇へ寄つて、その爲めに道を開いた。……何にも冠らぬ白髪頭の、眉毛の黒い、跣足の坊さんが、胸の上に腕を組んだまゝで、彼の傍を通つて、部屋中央に止つた。

『なせあんたはわしを信じなかつたのぢや？』と彼はいたはるやうにコウリンを見ながら、叱るやうな調子で訊いた。『あんたは天才ぢやとわしが言つた時にわしを信じたなら、この最後の二年間をかうまで悲しく、かうまで無趣味に暮らさんでもよかつたらうに。』

コウリンはまた自分は神に選ばれたもので天才であつたといふことを信じた。彼は黒坊主との以前の會話をみんなあり／＼と思ひ出したので、答

へようとした。所が血が咽から胸の上になら／＼と流れたので、彼はどうすればよいかを知らずに、無暗に両手で胸のあたりをかきまはして、とう／＼カフスを血で赤くした。彼は衝立の向うに眠つてゐるソアルワラニコライエフナを呼ばうと思つて、さうしようとな力を籠めて叫んだ――

『タアニヤ！』

彼は床の上に倒れて、両手を挙げながら、また叫んだ――

『タアニヤ！』

彼はタアニヤに哀求し、不思議な花を持つた大きな花園に哀求し、邸園に、兎毛のやうな根を持つた松の木に、ライ麥畑に哀求し、彼の驚くべき學問に、彼の青年時代に、彼の勇氣、彼の喜びに哀求し、いかにも美しかつた、生活に哀求した。彼は目の前の床の上に、大きな血の溜りを見たが、

弱つてしまつて一語も發することが出来なかつた。けれども言ふに言はれぬ無限の喜びが彼の全身に漲つた。バルコニーの下では夜樂が奏されてゐた。そして黒坊主は、彼が天才であつて、死んだのはたゞ弱い、人間の身體が平衡を失つて、もはや天才の覆ひとして役に立たなくなつた爲めであつたことを彼に叫びつけた。

ワアルワラ ニコライエフナが目を覺まして、衝立の後から出て來た時は、コウリンは死んでゐた。併し其の顔には動かすことの出来ない幸福の微笑が凍つてゐた。

(終)

(坪内)

日一十二月一 二
 刷印日五十二月二十年元正大
 行發日八十二月二十年元正大
 四十二月一年二

有所權著作

集フホエエチ

譯者	前田 晁
發行者	東京市日本橋區本町三丁目八番地 大橋 新太郎
印刷者	東京市小石川區久堅町百八番地 水谷 景長
印刷所	東京市小石川區久堅町百八番地 博文館印刷所

發行所 (東京市日本橋區本町三丁目八番地)
 博文館 (貯振口東京二番)
 定價 金五拾錢

泰西文學

前田 晁君譯 (再版)

短篇十種 モウパッサン集

全一冊 四六判
裝釘 瀟洒美本

正價金四拾五錢 郵稅金六錢

- 目次
- ▽モウパッサンの小傳
 - ▽ホルラ
 - ▽穴
 - ▽シモンの父
 - ▽頸飾
 - ▽盲人
 - ▽樽
 - ▽二兵士
 - ▽大佐の話
 - ▽宿屋

文學士小松月陵君譯 (再版)

沙翁物語十種

全一冊 四六判
裝釘 瀟洒美本
紙數 三〇〇頁

正價金四拾五錢 郵稅六錢

本書は英國少年の爲めにチャールズ、ラムと其姉メリーとが物したる沙翁物語中特に十篇を撰びたるものにして譯者の意志は廣く我國社會一般に不朽の大著沙翁劇を味はしめん事を庶幾するが故也

發兌元

の精華

吉江孤雁君譯 (三版)

短篇三種 ツルゲーネフ集

全一冊 四六判
裝釘 瀟洒美本
紙數 三五〇頁

正價金四拾八錢 郵稅金六錢

ロシアの文豪ツルゲーネフの傑作三篇を收む曰く「幻」曰く「ファウスト」曰く「ムム」曰く「ファウスト」とは作者が現實の世界と神秘の世界との接觸點可解と不可解との交渉を提へたるもの「ムム」は啞の戀と可憐の犬との物語にして哀愁と可笑味と其の筆端に横溢せり作者が如何に深く人生を解剖してこれを巧妙に再現したるか其の人生觀は如何自然觀は如何世界觀は如何此一卷は實に是れを明かに窺へ知らしむるもの也

相馬御風君譯 (四版)

短篇六種 ゴーリキー集

全一冊 四六判
裝釘 瀟洒美本
紙數 三百十頁

正價金四拾五錢 郵稅六錢

茲に譯出せられたる六篇は「ゴーリキー」が最も得意とせる短篇中更に傑出せるものを選びたるものなれば人一度是れを讀かんか大膽深刻なる描寫を以て成る歐洲文壇の新作風とかの男性的の力に充つと稱せられたる「ゴーリキー」の新人生觀とを窺ひ知るを得べし。

博文館

近代
西洋文藝叢書

第一期刊行十二册
菊判總クローズ上製
天金縁金模様摺込
總紙數六千六百頁

●正價一册金壹圓 (小包料) (内地十錢)

●十二册特價金拾圓 (外に小包料を要す)

昇曙夢君譯

決闘
生活の河

中村不折君裝幀
天金縁込金模様摺
菊判上製紙綴無比
紙數五百七十頁

『決闘』は現ロシア文壇の權威ツウブリンが學生の心血を搾れる傑作なり。主題は近代思潮を背景に、年若き少尉と美しき中尉夫人との戀を經緯として某聯隊の暗黒面を描破せるもの。期せずして露國軍隊の病所に觸れ、日露戰爭に於ける敗戦の主因を悉く指摘して當局者を戰慄せしめ一國の輿論を沸騰せしめたり。すべて章を分つこと廿三回。各場面を異にして不思議に寛力ある幾多の繪畫はそれよりそれへと回轉して讀者を酔殺せしめ止まず。これを分てば幾多絶好の短編となりこれを含すれば一個完璧の長編となる。而して之を貫くに近代虛無主義的新個人主義の哲學を以てす。茲に舊き社會の否定あり、新しき人生の肯定あり、享樂の福音あり、新宗教の憧憬あり。實に『決闘』は近代思潮のシムホル現代文學の總括とも謂ふべく、凡そ近代の思想感情は悉く此の一卷に結晶せらる。主觀の徹底せる。描寫の深刻精緻なる、情味の豊麗なる、技巧の清新なる、蓋し稀に見る所。今や我文壇新に昇曙夢氏の手に依つて絶好の翻譯を迎ふ。新生活に憧がれ新藝術に生きんとする者は此の書に於て始めて積年の渴望を醫せん結末に附したる『生活の河』は同作家の短編中の白眉なり。

近代西洋文藝叢書 (刊續) 目書

■ サラムボオ【小説】	佛	フロオベル	生田長江
■ 廣野の道【小説】	埃	シユニツツレル	楠山正雄
■ 死人の家【小説】	露	ドストエフスキイ	片上伸
■ 陥	佛	ゴンクウル	前田晁
■ 日の出前。織匠。鼠【脚本】	獨	ハウプトマン	小宮豊隆
■ 處女地【小説】	露	ツルゲネフ	相馬御風
■ クロイツェルソナタ其他【小説】	露	トルストイ	阿部次郎
■ 死よりも強し【小説】	佛	モウパッサン	中村星湖
■ 炎	伊	ダヌンチオ	森田草平
■ 氷島の漁夫【小説】	佛	ビエルロチ	吉江孤雁
■ サツフオオ【小説】	佛	ドウデエ	鈴木三重吉

文學博士 幸田露伴先生
饗庭篁村先生
塚原澁柿先生

校訂

藤島武二畫伯
橋口五葉畫伯

裝幀

空押及金模樣摺込
天金線製本頗瑰麗

文藝叢書

菊判總クローソ上製
每卷挿繪數十個挿入
新鑄十ボイント活字
第四卷印刷中

第一期刊行(凡隔月)十二册一紙數約壹萬頁(每卷七百五十頁乃至千餘頁)

正價一册金壹圓 (小包料内)

特價十二册金拾圓 (外に小包料を要す)

本書は時代の有なる熱烈の要求に應ぜんが爲めに出でたり時代は威力の絶大なるものを求む。本叢書の具する威力が絶大にして効果の雄偉なるは、廉價と眞實と精確と優麗とを提げて精神上及び物質上の大勢力を背後に有しつゝ、本書の巨艦を江湖に現出するの日に於て直に分

饗庭篁村先生校訂 第一卷 **忠臣藏文庫** 紙數九百頁 密畫數十個

いろは文庫(小説) 爲永春水作

忠臣水滸傳(小説) 山東京傳作

假名手本忠臣藏(淨瑠璃) 竹田出雲作

四十七石忠矢計(脚本) 河竹默阿彌作

幸田露伴先生校訂 第二卷 **西鶴文集** 紙數八百餘頁 密畫數十個

幸田露伴先生校訂 第三卷 **西鶴文集** 紙數八百餘頁 密畫數十個

日本永代藏 諸國はなし 胸算月
武朝二十四孝 萬文反古 西鶴置土産
武家義理物語 新可笑記 織西鶴名残の友

明せん。見よ。見られん。比較せよ。比較せられん。慎重に判断せよ。判断せられて而して後。是認せられ採擇せられんことを欲するは。進歩せる時代の出版界の最善最正の商理なることを信じて本書を新刊す。文藝の價値の如きは江湖既に知る復贅説を要せざる也。

(第一期刊行) 文藝叢書目書	
第一卷 忠臣藏文庫	饗庭篁村
第二卷 西鶴文集	幸田露伴
第三卷 西鶴文集	幸田露伴
第四卷 道膝栗毛全集	饗庭篁村
第五卷 俠客全集	塚原澁柿
第六卷 演劇脚本集	饗庭篁村
第七卷 忠義復讐傳	塚原澁柿
第八卷 南里見八犬傳	幸田露伴
第九卷 南里見八犬傳	幸田露伴
第十卷 南里見八犬傳	幸田露伴
第十一卷 淨瑠璃名作集	饗庭篁村
第十二卷 紀行文編	幸田露伴

文學士 片山孤村君著

最近獨逸文學の研究

全一冊菊判厚表紙 正價金壹圓
紙數五百四十頁 郵税金拾貳錢

本書内容

○神經質の文學 ○植神經質の文學 ○郷土藝術論 ○郷土詩人グスマーフ、フレンセン ○郷土詩人の宗教觀 ○自然主義の理想及技巧 ○獨逸に於ける自然主義の起源 ○フリードリヒ、ニイチエ論 ○獨逸劇壇の退歩 ○新戯曲家フランク、ユーテキント ○文藝と人格 ○文藝と肉情 ○女性と藝術 ○思考の情性 ○ゲーテが修養の一面 ○ゲーテとシルレルの友誼 ○ロマンチック派の自然觀 ○パウルセン教授と自然主義 ○ツルゲネフの虛無主義外數項

文學士 故鹽釜天颯君著

ゲーテの詩研究

全一冊四六判美本 正價金四拾錢
紙數三百八十頁 郵税金六錢

本書はゲーテが詩に現はれたる思想感情を釋ねて、彼が偽らざる人間性を曝露すると共に、技巧風格を究めて、横溢せる詩美を鐘愛せるもの、ゲーテが靈肉兩界の眞面目を知らんと欲せば、此書を措いて他に求むべからず、文藝に志す人は、机上必ず一本を備へざるべからず。

—(博文館發行)—

338
124



終